

『虚仮威』

『虚仮威』

作…中屋敷法仁

【登場人物】

僕

その妻

その娘・マナミ

彼女

長者

その女房

その父親

その長男・一太郎

その次男・二太郎

その三男・三太郎

山神様

座敷童

綾町獵介

産婆

村人

サンタクロース

トナカイ

ほか

「ここは劇場。衣裳に身を包み居並ぶ俳優たち。  
「僕」は、俳優たちの真ん中に佇む。  
僕の隣にいる彼女が、観客へ語りだす。

彼女 「すぐに会いたい」

僕も観客へ語りだす。

僕 「という連絡が彼女からあったのは、  
真夜中の2時をすぎた頃。

そんな時間にも起きていたのは、  
今日が12月25日、だったからだ」

彼女 「すぐに会いたい」

僕には、一人娘が寝静まるのを待ってから、枕元に  
クリスマスプレゼントを置くという任務が課せられていたが  
前日の幼稚園でのクリスマスパーティーの興奮冷めやらぬ娘の寝付  
きは、ことのほか悪く、気がつけばもう真夜中の2時」

彼女 「すぐに会いたい」

僕 「今は会えない。  
そう言い返せばよかったのだが、  
先月末に父親を失ったからの彼女は  
精神的に不安定な状態が続いていたから…」

彼女 「すぐに会いたい」

僕 「…すぐに行くよ」

僕 「僕は娘の枕元にプレゼントを置き、  
サンタクロースとしての任務を果たした後、  
タクシーで彼女の住むマンションへと向かった」

僕はマンションに向かいながら、

僕 「僕と彼女が一体どんな関係であるか。

…いくら言葉を尽くしても、  
その本質を理解してもらうことは不可能だろう。  
僕にだって、僕たちのことが  
どれくらいわかっていなのか、わからない。

彼女 「ただ、2016年の12月25日。深夜2時」  
「すぐに会いたい」

僕 「と、電話で呼び出されれば、  
寝ている妻と娘に黙って出かけてしまう程度には  
不適切な関係だったのだろう」

僕は、彼女のマンションに到着した。

彼女 「遅かったではないか」

僕 「とんでもない。道は混んでいなかったし、雪も無かった。いつもなら40分はかかる道が、

どういうわけか20分で来れた。

速かったねと、褒めてほしくらいだ」

彼女 「こんな時間に、よくも起きてましたね」

僕 「マナミにね、

クリスマスプレゼントを渡さなきゃいけないから…」

彼女 「マナミ？ なに？ やめて、言い直して」

僕 「娘にクリスマスプレゼントをね」

彼女 「なんだ君。そんなことをやっているのか」

僕 「父親だからね」

彼女 「そんなこと、任せればいいじゃないか。

本業のサンタクロースに」

僕 「冗談とも本気ともとれないことを口走るのは、彼女の癖だ」

彼女 「信心？」

僕 「サンタを信じていないのだろう。

だからサンタが来てくれない。故に

大企業のクリスマス商戦の餌食となり、

一銭の価値もない玩具にボーナスを注ぎ込む。

資本主義、物質主義、拝金主義のクソだな」

僕 「よかった。どうやら今夜の彼女は機嫌がいい」

彼女 「だからこそ、君を呼び出したんだけどな」

僕 「どういうことだ…？」

彼女 「父親の遺品を整理していくうちに、

私の家族に関するいろいろな資料が見つかったね」

僕 「どういうことだ」

彼女 「どうにも面白いことがわかってきたのだよ」

僕 「どういうことだ」

彼女 「今夜、君の世界がまるごと変わるような、

驚くべき話を教えてあげよう」

僕 「聞く気が失せた。こんな語り出しで、

どうやって興味を持って言うんだ」

彼女 「物語は今から100年前にさかのぼる」

僕 「しまった…始まってしまった」

彼女 「時は1916年。大正5年の12月」

僕 「今は2016年。平成28年の12月」

彼女 「世界は、第一次世界大戦の真っ只中」

僕 「世間は、クリスマスの真っ只中」

彼女  
僕

「この物語は、私のひいおじいちゃん、その家族の物語」  
「この物語は、妻と娘を家に残したまま、  
彼女の家に上がり込んでいる僕の物語だ」

彼女

「物語の舞台は、東北地方のとある寒村。  
その村の名前は…」

ゆっくりと現れる、長者。

長者

彼女

長者

彼女

長者

彼女

「村の名前は…言わなくていいんじゃないか？」  
「ほ？」  
「実名とか出すと、色々さわりもあるし…」  
「プライバシー」  
「プライバシー？」  
「村の名前はあえて伏せる。」

彼女

「その村で地主として権力を握っていたのが、  
私のひいおじいちゃんだった」

長者

彼女

長者

彼女

長者

彼女

長者

彼女

村人ら

「明治の始めの地租改正。その時にもウマイことやったらしく、  
村中の人間を小作人として従えていた」  
「そういう家に生まれた」  
「ひいおじいちゃん」  
「まだ年の頃は32」  
「父親を早くに亡くしたため、」  
「若くして家屋敷を受け継ぎ、」  
「すでに長者と呼ばれていた」  
「長者殿。長者殿」

村人に囲まれる長者。

村人

僕

長者

村人

「長者殿には特別な役目があった。  
村に恵みをもたらす、山の神様との談判よ。  
「カミサマ…？」  
「山の神は樹齢千年にも及ぶスギの巨木じゃ」  
「長者殿はことあるごとに山に入り、この神様に  
麓の村の窮状を訴える必要があったのじゃ」

山に入っていく長者。山神と対峙する。

長者

山神

長者

「神様…」  
「なんだ長者。うろうろしてると食っちゃまっぞ」  
「今年は何物かとれず、飢えに苦しむものがぎょうさん出ます。」

山神 「山に住む、獣のお命をいただきたい」  
山神 「山鳥60羽、ウサギ30羽、鹿10頭までなら獲ってよいぞ」  
長者 「キノコ、タケノコは？」  
山神 「そりゃもう獲り放題」  
長者 「ありがとうございます。」  
長者 「おい、山の神からお許しが出たぞ。とれ、とれ」

村人たち、山の恵みを貪る。

長者 「こちらから神様に話を持って行くこともあれば、  
神様から呼び出されることもしばしばあった」

突如、冷たい風が吹き荒れる。

村人 「風（おろし）じゃ。山から風が吹いてきた」  
長者 「風というのは、山から吹いて来る冷たい風じゃ。風じゃ」  
村人 「山の神様が我らをお召しじゃ。」  
長者殿、行って来てくれ」

再び山に入る長者。山神と対峙する。

山神 「このブナの木を見よ。  
大きく十文字に傷がつけられておる」  
長者 「これは…」  
山神 「明らかにお前ら人間の手による者じゃ。  
下手人を差し出せ」

村人の手により、小僧が引っ立てられてくる。

長者 「御神様。それをやりましたのは、こちらの小僧でございます」  
山神 「何故こんなむごいことを…」  
長者 「親戚の者より預かった軍用ナイフ。  
その切れ味を試したいがため、このようなことをしたと…」  
山神 「命を弄ぶ不屈き者じゃ。この小僧に、同じ傷をつけよ」  
長者 「同じ傷ですか」  
山神 「このブナと同じように、軍用ナイフとやらで、  
腹に十字の傷を入れよ」  
長者 「それは…」  
山神 「できぬか。ならばこのブナの仇討ち。  
村ごと滅ぼすまでのこと」

長者、小僧の元へ行き、

長者 「覚悟を決めよ。山に従わねば、村が死ぬ。村が死ぬねば、どうせお前も死ぬのじゃ」

長者、軍用ナイフで腹に傷をつける。

長者 「我慢せよ。我慢せよ……」

小僧の父親（村人）がやってくる。

長者 「すまん。倅を守れなんだ」  
村人 「これしきのことと済んだのじゃ。  
むしろよかったと思わねば。ほら長者殿に礼をしろ」

長者、女房を傍らに坐らせ、  
子供らに語りかける。

長者 「我が一族は村の長者。  
山の神と交わり、村を守る務めがある。  
村に何か起こったならば、命をかけて働くのだぞ」  
子供ら 「はい」

長者 「……ん？ 待て。一太郎はどこじゃ？」

子供ら 「ん？」  
長者 「二太郎」  
二太郎 「知りません」  
長者 「三太郎」  
三太郎 「知りません」  
長者 「お前」  
女房 「知りません」  
子供ら 「親父殿」  
長者 「知りません」

あちこち探しまわる長者たち。

長者 「おーい。一太郎」  
子供ら 「兄貴。兄貴」  
長者 「一太郎」

長者、床の間の前に行くと、

長者 「……そこにいるのか、一太郎」  
一太郎 「親父殿か」  
長者 「いつまで寢床にこもっておる。」

早く起きてこい」

一太郎

「入らないでくれ。待つてくれ」

長者

「ここは俺の家で、お前は俺の倅」

一太郎

指図される覚えは無い」

長者

「そこを曲げてお願い申す」

一太郎

「何を待つ」

長者

「俺が終いまで書き記すのを」

一太郎

「書き記すとは」

長者

「血判状じゃ」

一太郎

「けっぱんじよう？」

「今日12月25日は俺の生まれ日。」

俺も今年で10歳じゃ。」

己がどのように生きたいと願っているのか、

その偽らざる心根をこのふすまに書き記した。

親父。おふくろ。弟たちよ。見てくれ」

床の間の引き戸が開かれる。

正面のふすまには、赤い血で書かれた文字が。

一太郎

「俺は誓う。」

今日より10年のうちに

この天土の狭間にある全てを我が手中におさめる。

天下をまるごと乗っ取り、一族の繁栄、

家族の幸福を実現してみせる。

大正5年12月25日」

一太郎、さらに血印を押す。

三太郎

「兄貴の言ってることは、何もかも分からねえな」

二太郎

「兄貴。血じゃ。血がべったり…」

一太郎

「これこそまさに決意の証。」

誓いの文句は自らの生き血でしたためた」

女房

「なにもそこまでしなくとも…」

一太郎

「ここまでしなくては、

親父殿にはわかってもらえぬと思ひましてな。

親父殿。こんな小さな村のことは

親父殿が気にかければこと足りる。

俺はもっと大きなことを考えたい。世界征服じゃ。そして

小さなことを願いたい。家族の幸せじゃ。

どうじゃ。男子として立派に育っているであろう」

長者

「立派じゃ。立派じゃ。」

立派すぎて怖いくらいじゃ」

女房

「どうして世界征服など大それた事を」

一太郎

「それこそが何よりの親孝行と考えたからじゃ。

親父殿が好きだからじゃ」

長者ら

「え？」

一太郎

「俺は親父殿が大好きじゃ」

長者と女房。

長者

「俺はあいつが怖い。

女房

「何が怖いのです？」

長者

「あいつは俺のことを好いている」

女房

「好かれて何が悪いんです」

長者

「悪いぞ悪いぞ。父親が好きなど、まるで女じゃ。男は父親を嫌うものじゃ。憎むものじゃ。

何より俺がそうだった」

長者、父親の姿を思い浮かべる。

長者

「俺は親父が嫌いだった。

兄弟の一番上に生まれたせいとか、大切に育てられはしたが、親父ほど嫌な人間には今日まで会ったことが無い。

あの日のことは忘れない。

おふくろ様が、四人目の子を生んだ日じゃ」

産婆、血だらけの赤ん坊を抱えながら登場。

産婆 「女子（おんな）じゃ。女子じゃ」

長者 「女…」

長者、赤ん坊を抱く。

長者

「俺には既に二人の弟がいたが、それは初めての妹じゃ。

俺は素直に嬉しかった。

おい、兄じゃぞ。よかったな。お前には三人も兄があるぞ」

そこに現れる、長者の父親。

父親

「なんじゃ。女か…」

長者

「親父の声はひどく落ち込んでいた」

父親

「女など、外に嫁に出すだけじゃ。なんの足しにもならん」

父親は、出産を終えたばかりの母親に



父親

「おい。お前にはすぐまた生んでもらうことになるぞ。男はまだ、たったの三人じゃ。」

せめて七人はいなくては、この家屋敷を守れまい。

おい、産婆殿。この女、いつから孕ませることが出来る？

早く生ませねば、無駄に年を取るばかりじゃ…」

長者

「親父どの。俺はたまらず声をあげた。」

親父どの。せめて赤子を抱いてやれ。

おふくろ様にねぎらいの言葉をかけてやれ」

父親

「うるさい。黙れ」

長者

「この、うるさい黙れ以来、

親父と言葉を交わしたことは三回のみだ。

学校に入ったという報告と、学校を出たという報告と、あとは「

女房が現れる。

父親

「嫁をもらってきてやったぞ」

長者

「え…？」

父親

「女学校に通い、なまじ学をつけているのが気に喰わん。

しかし、こいつの母親はこの村一番の畜生腹。

死ぬまでに男を七人、女は八人も生んだそうだ。

末娘であるこいつも、その腹を受け継いでいるはず」

長者

「…え？」

父親

「安心しろ。」

こどもはすぐ、できるぞ。

たくさん生ませろ」

長者

「俺が女房を大切にしたのは、こんな父親へのあてつけだ。

明治の中頃、父親はコレラでぼっくり死んだ。

おふくろも後を追うように死んだ。

俺の倅どもを見ることも無く」

再び、長者と女房。

長者

「俺は倅が怖い」

女房

「何が怖いのです？」

長者

「親父殿に樂をさせたいということは、

あてつけなのではないか。

さんざん苦勞をかけている、俺への恨みから、

そう思ったのではないか」

突然、彼女が語りだす。

彼女

「話が、いろいろと飛んでしまったね」

長者  
彼女 「はい？」  
「物語を1916年。大正5年の12月25日に戻したい」

物語は、彼女の言う通りに戻る。  
次男と三男の姿。

二太郎 「兄貴は俺たちとは出来が違う」  
三太郎 「育てられ方も違っていた」  
二太郎 「寝る場所、着るもの、食べるもの」  
三太郎 「何かもが俺たちとは別」  
二太郎 「風呂にだって一緒に入った事は無い」  
三太郎 「世界征服とは大それたことを誓ったのう」  
二太郎 「おもしろい。何よりかっこいい。俺たちも誓うぞ」

弟たちは誓う。

三太郎 「これより10年のうちに、うまいものをたくさん食べる」  
二太郎 「これより10年のうちに、いい女をしこたま抱く」

三太郎 「うーむ…ひどい」  
二太郎 「あえてひどい誓いをたてた。  
次男、三男の出来が良ければ、長男は地獄。  
兄貴の為に出来の悪い弟でいなければ」  
三太郎 「それが何よりの兄孝行」

彼女 「それからまるごと1年後。  
翌1917年、大正6年12月24日。  
ロシア革命の成功からおよそ一ヶ月と二週間後」

身をよせ合う三兄弟。

二太郎 「世界征服の誓いからもう一年じゃ。計画は進んでいるのか？」  
一太郎 「まったく進んでおらん」  
二太郎 「おい」  
一太郎 「なにしろここは東北の田舎。電気もガスもない山奥じゃ。  
獣同然の暮らしては、天下を取るなど夢のまた夢…。  
学問を修め、見聞を広めねば…。  
お前らはどうじゃ？」  
三太郎 「うまいものを食いたいが、うまいも見つからない」  
二太郎 「いい女を抱きたいが、いい女などこの村におらん」  
兄弟ら 「はっはっは…」

彼女 「その翌朝。12月25日。事件は起きた」

長者の元にやってくる一太郎。

一太郎 「親父殿。これはなんじゃ」

長者 「なんじゃとはなんじゃ」

一太郎 「急にこんなものをくれるとは、

柄にも無く洒落たことをするではないか」

長者 「こんなもの？柄？洒落？」

一太郎 「今日12月25日は俺の生まれ日。

俺もめでたく11歳。

それを祝ってくれたのだろうか」

長者 「待て。何を話しておる」

一太郎 「これじゃ」

一太郎、包装された箱を取り出す。

一太郎 「朝起きたら枕元に置いてあった。開けてみれば中には、

俺がかねてより欲しがっていた、鉛筆と消しゴムがどっさり。

親父殿がくれたのだろう」

長者 「知らぬぞ。俺は何も知らぬ」

一太郎 「とぼけるのか。どう考えても親父殿ではないか」

長者 「おい。お前。こいつに鉛筆を買ってやったのか」

女房 「知りません」

長者 「知りませんだと。ならばこれをどう申し開きするのだ」

女房 「知りません」

一太郎 「焦らずじっくり勉強に励めというのだな。

親父殿の思い、しかと受け取った」

三太郎 「わーい。ドーナツじゃ。ドーナツじゃ」

長者 「なんだ、なんだ」

三太郎 「朝起きたら、枕元に。ドーナツじゃ」

二太郎 「朝起きたら、枕元にハイカラな山高帽じゃ」

三太郎 「これを食べるという事か」

二太郎 「これを被り、いい女を口説けという事か」

一太郎 「弟たちにはドーナツと山高帽をあげたのか。

よかったな、お前ら」

弟ら 「親父殿、ありがとう」

長者 「知らんぞ、俺は何も知らん」

それを見ていた僕と彼女。

彼女 「12月25日に…こどもたちに…

犯人はあいつしかない…」

僕 「…サンタクロース？」

彼女

「ホンモノの」

「おとぎ話にしたって、

もうちよっとよくできてると思うけどな」

「おとぎ話じゃない。」

「これは私のひいおじいちゃんのドキュメンタリー」

「おい。平成という時代を生きる私のひ孫」

「ほ？」

「夜は短い。メインストーリーをほれ、進めなさい」

「ラジャ」

長者

「翌1918年。大正7年。12月24日」

彼女

「ドイツ降伏による第一次世界大戦の終結から、  
およそ一ヶ月と二週間後」

一家団欒の時。

一太郎

「明日12月25日は俺の生まれ日。」

長者

「俺もめでたく11歳。尋常小学校だってもうじき卒業じゃ」

一太郎

「よし。学校を出たら、すぐに働くのだぞ」

長者

「働かぬ。俺をさらに、上の学校に行かせてくれ」

一太郎

「上の学校？」

長者

「中学校じゃ」

女房

「中学校？そんな学校があるのか？」

長者

「そんな学校があります」

一太郎

「通うのは5年じゃ」

長者

「5年？まだ5年も学校に行くのか？」

一太郎

「どうせ行くなら一流がよい。東京の中学がいいなあ」

長者

「東京に？駄目だ駄目だ。うちにそんな銭はない」

一太郎

「おふくろ様だつて女学校に通っていたではないか」

長者

「それは、こいつの家が、かつては財産家だったからだ。  
今は破産して見る影も無い」

女房

「うえーん」

一太郎

「うちだつて村一番の土地持ち物持ち金持ちではないか」

長者

「それでも暮らしにゆとりは無い。」

隣村の長者ほどに、うちも金があればなあ」

独り「ちる」一太郎。

一太郎

「たしかに隣村の長者はおかしいほどに金持ちじゃ。  
ありゃきつと、家の中に、飼っているに違いない。

座敷童をな…」

一太郎

「ザンキワラシ…？」

僕

「間違いない。奥の座敷に隠してるんだ。」

そいつをさらってこれたらなあ」

彼女

「などと考えながら眠りについた。  
その翌朝。12月25日。また事件が起きた」

一太郎

「なんじゃ、これは…」

一太郎の寢床の枕元に小箱が。  
開けるとキューピー人形が。

一太郎

「枕元にキューピー人形じゃ。モダンじゃ。ハイカラじゃ。親父殿め。俺を中学に行かせる金がないと言いなながら、こんなおもちゃをくれるとは。やさしいやら、憎たらしいやら。ツンやらデレやら。いや、待てよ。親父殿は口べたじゃ、これで何事か成せということか…ひらめいた」

一太郎

「おい、二太郎、三太郎」

弟たち

「はい」

一太郎

「ついてこい。銭を稼ぐぞ」

三兄弟は並んで駆け出す。

二太郎

「一体どうやって銭なんて稼ぐんだ」

一太郎

「銭がある家から奪うのよ」

二太郎

「なんだそりゃ。盗人じゃねえか。俺はごめんだ」

一太郎

「なに、その家のもんを盗めば盗人だが、

三太郎

その家のもんじゃなけりや盗人にならない」

一太郎

「兄貴の言ってることは何もかもわからねえな」

三太郎

「ついたぞ。隣村の長者の家だ」

屋敷に忍び込む三兄弟。

いちばん奥の間に到着する。

一太郎

「よしよし…ここか」

ふすまをあげると、異形の者が。

座敷童である。

一同

「わーっ」

一太郎

「幽霊、物の怪、妖怪変化。」

二太郎

「そういった類いの者に出会った時、

三太郎

言っではいけない言葉がある」

二太郎

「誰だお前は」

一太郎 「これはダメだ」  
三太郎 「誰だお前は」  
一太郎 「つまり相手に侮られるからだ」  
座敷童 「こいつら、俺のことは知らぬな」  
一太郎 「と。だから、出会い頭にこう言ってるのだ。  
嘘、ハツタリ、虚仮威……」

“お前だな。お前のことを知っている”  
そうすれば、相手が聞いてくる

座敷童 「誰だお前は」  
一太郎 「これでこちらが、優位にたった」  
一太郎 「一緒に遊ぼう」  
座敷童 「遊ぶだと？」  
一太郎 「ほら、キューピー人形だ」  
座敷童 「キューピー。ハイカラな……なんてハイカラなおもちゃじゃ」  
一太郎 「よし、運ぶぞ」

三兄弟は座敷童を家まで運んでくる。

長者 「このガキは、どうした？」  
一太郎 「隣村の長者の屋敷からさらってきました」  
長者 「あの家に、こんな小さなガキはいなかったはずだが」  
一太郎 「いませんよ。人間じゃないんです」  
長者 「人間じゃない。まさかっ」

彼女 「そう、まさかの……」  
僕 「座敷童だろ？」

一太郎 「座敷童です。」  
一同 「座敷童？」

彼女 「びっくり」  
僕 「……」

一太郎 「今日からうちで育てましょう。  
こいつがいれば、うちにもほどなく大金が舞い込んできます」  
座敷童 「ふざけんな」  
長者 「喋った」  
座敷童 「いかにも俺様は座敷童。家々に福を呼び込むフェアリーじゃ。  
お前、自分が何をしたのかわかってるのか？」  
一太郎 「人さらい？」  
座敷童 「それよりも罪深い、神さらいだ。  
なんて罰当たりなやつだ。  
こんな家、今すぐ出ていってやる」

一太郎 「そりゃ無理だ。おーい。綾町っ」

綾町（あやまち）と呼ばれた者が、現れる。

綾町 「はい」

一太郎 「紹介しよう。綾町だ」

綾町 「綾町です」

座敷童 「何なんだ、こいつは？」

一太郎 「何なんだ？」

綾町 「私にもよくわかりません」

座敷童 「何なんだよ」

一太郎 「すぐに始めてくれ」

座敷童 「何を始めるんだよ」

綾町、呪文を唱える。

綾町 「この屋敷に、結界を張りました。

もう逃げられませぬ」

一太郎 「そういうことですよ、神様さん」

座敷童 「笑わせるな。こんな田舎もんが張った結界で、

俺を封じ込められるか」

座敷童が家から出ようとすると、激しい電流が流れる。  
家から出られなくなっている。

座敷童 「うそだろ…」

綾町 「本当です。何度もお試しになって結構。破れません。

ここに札を貼りました。この札が外れば、結界も解かれます」

座敷童、札を外そうとするが、

座敷童 「あちちち…」

綾町 「外せるわけ無いでしょう。これは人間にしか外せません」

一太郎 「諦めてくれ、座敷童。」

諦めて、うちに福を運んでこい。金を運んでこい。

この俺が中学校に進学する為に」

座敷童 「ちきしょー」

座敷童、ちよつと舞う。

長者 僕 「始まった始まった。おい、もったいないぞ。見とけ見とけ」

長者 「なんすか？」

長者 「座敷童が福を呼び込むためにやる、ちよつとした舞じゃ」

村人

「そんなこんなで長者殿の家はますます豊かになったようじゃ。ということとは…ハッ。隣村の長者殿の家は潰れてしまったようじゃ」

長者

「座敷童めを捕まえてくるとは、大したものじゃ」

長者

「それもこれも、親父殿がキューピー人形をくれたからじゃ」

一太郎

「この座敷童め、モダンな人形には目が無いようだな、キューピー人形に釣られて来たのじゃ」

座敷童

「キューピー」

長者

「キューピー？」

一太郎

「親父殿が俺にくれたものじゃ。枕元に置かれたこのキューピーを見た時に、俺は親父殿の想いを悟った。」

俺に出す銭はないが、このキューピーを使って大業を成せと

三太郎

「おいしいキャラメルじゃ」

二太郎

「ハイカラなマントじゃ」

一太郎

「弟たちにはドーナツと山高帽をあげたのかよかったな、お前ら」

弟ら

「親父殿、ありがとう」

長者

「おい。お前。俺は良い夫とは言えないかもしれん。しかし、隠し事はやめてくれ。俵の生まれ日にもものを買ってやるなら、ひとこと言ってくれ。」

女房

「知りません」

長者

「知りませんだと。ならばこれをどう申し開きするのだ」

女房

「知りません」

一太郎

「我が家に座敷童童が住むことになった」

座敷童

「住んではいけない。捕らえられているのじゃ」

長者

「うちもだいぶ銭が出来た」

一太郎

「それを、ゆとりというんですよ親父殿」

長者

「この銭はお前が稼いだものだ。どう使っても構わんぞ」

長者

「ではかねてからの願い通り、東京の中学校に行かせてくれ」

一太郎

「教員にでもなるつもりか。」

長者

「それとも資本家か、政治家か」

一太郎

「親父殿。真っ赤な生き血でしたためた、俺の誓いを忘れたか」

一太郎

「親父殿。真っ赤な生き血でしたためた、俺の誓いを忘れたか」

一太郎

「一太郎、床の間の引き戸を開け、件のふすまを見せる。」

一太郎

「俺の夢は世界征服と家族の幸せ。」

長者

「その為に、学問を修め、東京で見聞を広めるのよ」

一太郎

「達者でな。たまには帰ってこい」

一太郎

「親父殿。立派な息子をもってよかったな」



長者

「自分で言うな」

それを見ていた山神。

山神

「倅を東京に行かせたと」

長者

「あ、神様」

山神

「愚かじゃな。離れて生きていけるものか」

長者

「いや、倅は頭が良いのです。何も心配いりません」

山神

「心配なのはお前のことじゃ。親がなくとも子は育つ。しかし、子がいなくては、子が側にいなくては、親はつらいものだぞ」

長者

「いなめない…」

山神

「で、今日はなんの話じゃ。」

長者

「うろろうろしていると食っちまうぞ」

長者

「先頃の台風と長雨で、戸板が壊れた家が何軒か出たようです。」

山神

「しかし材木を外から買うゆとりはございません。」

山神

「山から、大切なお命をいただきたい」

長者

「何を何本ほしいのじゃ？」

山神

「ヒノキを、大きなものであれば3本もあれば」

山神

「わかった。おい、お前とお前とお前」

木たち

「はいっ」

山神

「聞いていたな。明日、死ぬよ。」

木たち

「はいっ」

山神

「祈禱を済ませたら心おきなく斧を入れよ」

長者

「ありがとうございます」

山神

「誰にやらせるつもりだ」

長者

「それは、村の若い者たちに」

山神

「そうではない、祈禱じゃ。お祈りじゃ。」

長者

「この者たちの供養じゃ」

山神

「それは、この度も、綾町にやらせるつもりです」

長者

「綾町かあゝ」

山神

「あら、イヤそうなりアクション…」

長者

「まあ、あいつは修験者としては優れておる。」

山神

「法力もたしか。見事なものじゃ。」

山神

「ただ…わしは好かぬ」

綾町

綾町、祈禱を行なっている。

綾町

綾町、祈禱を行なっている。

綾町

綾町、祈禱を行なっている。

綾町

「万事、滞り無く済みもうした。斧を入れてください」

綾町

村人たちが木を切り倒す。

綾町

村人たちが木を切り倒す。

綾町

「よし。終わりましたら祭りでございます。」

綾町

「よし。終わりましたら祭りでございます。」

綾町

「よし。終わりましたら祭りでございます。」

山の恵みに感謝する豊年祭を執り行う。  
山の神様を信じ奉る心、それをお伝えするのじゃ」  
「さすがは綾町」

村人  
綾町  
長者  
山神

綾町。山の神がお前のことを言っておったぞ」

山神  
綾町  
長者

「ほう、神様はなんと」

「わしは好かぬ」

「と」

「…悲しいことです。こんなにも、この山に、この村に、  
こんなにも尽くしているというのに」

綾町  
長者

「今から十二年前。1906年。明治39年。  
倅が生まれる数日前」

村人たちが集まり、話し合っている。

村人

「どうもおかしい。畑から作物を盗んでいるものがあるぞ。

長者  
村人

隣村のやつらか。それとも、同じ村の人間か」

長者  
村人

「待て待て。疑い合えばきりがない」

長者  
村人

「お、長者。当時まだ二十歳そこそこ。何か策があるのか？」

長者  
村人

「今夜は俺の畑のそばに、この籠をおいておく」

長者  
村人

「中には大きな握り飯」

長者  
村人

「おお」

長者  
村人

「そこにパパッとネコイラズ」

長者  
村人

「あー」

長者  
村人

「作物を盗みに来た者がこれを食べれば、たちまち腹を壊す」

長者  
村人

「翌朝」

再び、集まっている村人たち。

村人

「籠の中身が空っぽじゃ。誰ぞ食うたか」

冷たい風が吹き荒れる。

村人

「嵐じゃ。山から嵐が吹いてきた。

山神  
長者

山の神様が我らをお召しじゃ。

長者殿、行ってきてくれ」

山神

「長者。こいつは何者じゃ」

長者  
山神

「知りません。村の者ではありません」

長者  
山神

「村の者に毒を盛られたと、わしの元に来たのじゃ」

長者  
山神

「さてはお前、握り飯を食ろうたな。」

長者  
山神

近頃、家々から作物を盗んでいたのもそなたであろう」

綾町 「いかにも。作物を盗んだのはこの俺。  
堪忍してくれ…飢えていたのじゃ…」  
長者 「山神様。こやつのは置きは我らに御任せください。  
ひとまず、体を治してくださいませんか？」

山神、綾町の体を癒す。

綾町 「助かりました…ありがとうございます」  
長者 「名前を名乗れ。どこから来た」  
綾町 「綾町獵介と申します。」  
長者 「各地の霊山で修行してきました修験者で、  
今が故あって、物乞いに身を落としております」  
綾町 「故とはなんだ」  
長者 「それは話せません。では失礼…」  
綾町 「させるか。お前の仕置きは村の衆との寄り合いで決める。  
まずは大人しく縄にかかれ」

綾町、荒縄で拘束される。

村人 「石を投げろー」

村人たち、綾町に投石。すると。

村人 「ん？待て。何かしゃべるぞ」  
綾町 「…生まれてくることも、男の子ですぞ」  
長者 「なんだと？」  
綾町 「五日後の明け方、下弦の月が向こうの山に隠れる頃、  
生まれます。ご安心を。お家さまのお体も無事です」  
長者 「お前…」  
綾町 「私には何でも見通す神通力がございます。  
この予言、もしも見事に当たりましたなら、  
私の力に免じ、この縄をといてください」  
長者 「…もしも外れたら」  
綾町 「百姓にとって作物は命に等しい。  
その命を荒らしたのです。  
すぐに叩き殺して結構です」  
村人 「五日後」

長者と綾町。

綾町 「…生まれましたか。男でしたでしょう」  
長者 「村から出て行け」  
綾町 「出て行こうにも、他に行く所はございません。しばらく、

山神  
長者 「この村においてももらうことはできないでしょうか？  
この村のために、この力、大いに役立てたいと思います」  
「よいのか、そんなあやしいやつを村において」  
「問題ありません。それに、修験者としての力は本物です」

村人 「ここまでが僕たちと綾町が初めて出会った思い出のシーンです。  
物語は再び1908年。大正7年」

一太郎と綾町。

綾町 「ぼっちゃんぼっちゃん、東京に行かれるそうですね」

一太郎 「見送りに来てくれたのか」

綾町 「神仏のご加護がありますように」

一太郎 「どうだろうな。お前の法力など、役に立つかな」

綾町 「私の力をお疑いですか。私の神通力は、

あらゆる妖怪を退けることが……」

一太郎 「そうじゃない。俺は東京に行くのだ。東京には、

妖怪よりも恐ろしい者が棲んでいる」

綾町 「はて？」

一太郎 「人間だ」

長者 「手紙をよこせ、とは言わなかった。

あいつは十二歳だが、俺よりものを覚えている。

あいつが書いた文字など、あいつが書いた話など、

俺にわかるわけではないからだ」

一太郎 「ものを喰う銭を惜しんでも尚、俺は親父殿に手紙を書いた。

親父殿が知らない文字で、知らない話を書いた。

読めない手紙を出すことが何よりの

親孝行だと思ったからだ」

手紙を読む長者ら。

長者 「……読めない」

女房 「読めませんね」

二太郎 「読めないね」

三太郎 「読めないね」

座敷童 「読めないね」

長者 「読めない手紙を読みながら、東京で生きる俵の姿を思い描き、  
また一年がたった。翌1919年。大正8年」

突然、彼女が語りだす。

彼女 「喉かわいたな」  
長者 「…何を？」  
彼女 「喉かわいたな。」

長者たちの物語は一時、中断する。

彼女 「飲もうか」  
僕 「…もちろん飲むよ。その為にわざわざタクシーで来たんだ。真夜中に大の大人が、大の大人の話聞くのに、酒かタバコか音楽か、あとはなんだ？間接照明か？何かないと気恥ずかしくっていけない」

彼女 「飲もうか」  
僕 「と言ったくせに彼女は何も用意しない。僕が何かを用意するのをじっと見ている。僕はゆっくり飲み物を用意するのだ。黒霧島の…水道水割りだ。カルキ臭さが惨めでたまらない」

水割りを飲みながら、

僕 「彼女は、一体さつきから、なんの話をしているんだろう。明治だ、大正だ、神様だ、座敷童だ。わけがわからない。が、終わらないうちは帰してもらえそうにない。帰る…どこに帰るってんだ。僕には帰る家なんてない。妻も娘も、来年の春には他人になる予定だ。今住んでる家だって、ヒトのものになる。僕は、ここにいるべき人間じゃないのかもしれない。が、かといって、どこに帰るといふこともないのだ」

一太郎が飛び出してくる。

一太郎 「帰って来たぞ」  
二太郎 「兄貴が帰ってきた」  
一太郎 「おい、座敷童。お前も出迎える」  
座敷童 「べーだ」  
一太郎 「相変わらず生意気なヤツだぜ」

長者 「翌1919年。大正8年12月24日」  
彼女 「ヴェルサイユ条約締結からおよそ半年後」  
二太郎 「兄貴。東京はどうだい。楽しいかい」  
一太郎 「東京はだめだ。ありや人間が住む所じゃねえ」  
三太郎 「え、でも、人間がたくさん住んでいるんだろ？」

一太郎 「東京に住んでるやつは、もう人間じゃねえ」  
二太郎 「じゃあ、なんだい。妖怪かい」  
一太郎 「妖怪でもない。東京に住めば、人間も妖怪も、何もかも東京になっちまう」

三太郎 「兄貴の言ってることは何もかも分からねえなあ」

一太郎 「お前らは何をしていた」

三太郎 「しっかりとごはんを食べていた」

二太郎 「しっかりと女を抱いていた」

兄弟ら 「はっはっは…」

長者 「よく帰って来た」

一太郎 「暮れと正月くらい帰らねば」

長者 「何か変わりはありませんでしたか」

一太郎 「何もかわらん。相変わらずここは寒い」

長者 「お前は東京で何をやってる」

一太郎 「親父殿に話してもわかるまい」

長者 「部落解放運動、婦人解放運動、社会主義運動…」

一太郎 「運動と名のつくものには手当たり次第に参加している」

長者 「連合軍のシベリア出兵に全国各地の米騒動」

一太郎 「世の中は乱れに乱れておる」

長者 「世界征服を企む者として、世の動きをしかと見据えねば」

三太郎 「兄貴の言ってることは何もかも分からねえなあ」

一太郎 「さて親父殿。明日は俺の生まれ日じゃ」

長者 「それがどうした」

一太郎 「俺も今年で13歳。実は欲しい物があつてな、

是非ともそれをくれくれおくれ。英語の辞書じゃ

さすがに高くて手が出せない」

長者 「今年もまた何かくれようとしているだろうが、

それは弟たちにやって、ぜひ英語の辞書を…」

一太郎 「待て。そのことについては、

お前と得心ゆくまで語らねばならぬ」

長者 「去年、一昨年と、お前の生まれ日に

枕元に置かれていたという鉛筆。キューピー人形

それらなのだが…全く身に覚えが無い」

一太郎 「バカな」

長者 「バカな、だ」

一太郎 「これはおかしいことじゃ」

女房 「おふくろ様が？」

一太郎 「知りません」

長者 「では一体、誰が。何者が、

何故あつて、そんな…うれしいことを」

一太郎 「神様からのお恵みじゃと思つたが、鉛筆もキューピー人形も、

山の神には用意できぬハイカラな品物

ためきか、きつねか、とも思つたが、

やつらの幻術はもって半日。合点がいかん」

長者

「明日12月25日はお前の生まれ日。また何か、奇妙奇天烈な、でもちよっぴりうれしいこと、起こる気がしてならん。よいか、今夜は寝ずに起きていろ」

彼女

「果たして翌12月25日。深夜未明。それは現れた」

その夜。外では冷たい夜風が吹きすさぶ。

長者

「寝ずの番とは言ったが、今日はいちだんと冷える。悴たちはしっかりと起きているんだろうか」

二太郎と三太郎は、寝ている。

長者

「寝てる…二太郎、三太郎。相変わらずの出来の悪さだ」

三太郎

「ムニヤムニヤ。もう食べられないよ…」

長者

「お腹がいっぱいという夢を見ているんだな…」

二太郎

「ムニヤムニヤ。おねえさん…」

長者

「何やらスケベな夢を見ているんだな…」

鈴の音色が鳴り響く。

一太郎

「なんだ…この鈴の音色は」

サンタクロースの扮装に身を包んだ彼女が現れる。

一太郎

「何じゃあいつは！」

赤い洋服…白いヒゲ…大きな袋を肩からかつぎ、不気味に笑う…奇怪な老人じゃ…」

サンタ（彼女）、弟たちの部屋に行く。

一太郎

「弟たちの部屋に？」

サンタ、プレゼントを置いていく。

一太郎

「枕元に何か置いてるぞ」

サンタ、次なる部屋へ。

一太郎 「いかん、俺の部屋に来る。戻らねば。寝たふりします」

サンタ、一太郎の枕元にもプレゼントを置き、立ち去る。

一太郎 「親父殿っ」

長者 「どうした」

一太郎 「出た…出たぞ…」

長者 枕元に高価な品々を届ける異形の者じゃ」

長者 「屋敷はどこもかしこも錠を下ろし

ネズミ一匹入る隙間はない。

どうやって入って来たというのだ。

一太郎 「わからんが、たしかに現れた。」

赤い洋服、白いヒゲ。大きな袋を肩からかつぎ、

不気味に笑う老人じゃ。枕元にこの箱を置き、立ち去った。

すぐに後を追うと、そこにいたのは鹿によく似た姿の珍獣」

トナカイの扮装をした僕が現れる

一太郎 「老人は、珍獣のひく大きなソリにまたがったかと思えば、

夜空に飛び去ったのじゃ…」

座敷童 「なんだよ…すげー怖いじゃん…」

一太郎 「座敷童のお前が言うな」

長者 「赤い姿となれば…天狗か」

一太郎 「布袋尊かもしれませぬ。大きな袋を下げていましたので」

長者 「とにかく、この世の者ではないことはたしかじゃ」

三太郎 「やったー。枕元にカステラじゃ」

二太郎 「枕元にロイド眼鏡じゃ。おしやれ」

一太郎 「見てくれ親父どの。英語の辞書じゃ。

俺が欲しかったものじゃ」

長者 「これがやつらの置き土産。」

おそろしい。おそろしい。おそろしいが、

ちよっぴりうれしいこと、起きた。カステラ、おいしい」

一太郎 「あいつが俺に、鉛筆とかキューピー人形を…」

長者 「一体、何者なのじゃ」

一太郎 「わけわからん」

一同 「わけわからん」

一太郎 「わけわからんことを相談するなら、

わけわからんアイツしかいない。綾町っ」

綾町 「もちろん、それは、ものけ…未成仏霊の類でしょう」

長者 「しかし、この高価な品々はどう説明する。

リアルにあるんだけど。英語の辞書、あるんだけど」

綾町 「それは私にもわかりませぬ。ひとまずここは…」



一同  
綾町

「ひとまずここは…？」  
「様子を見ましよう。」  
「3年間、3度にわたり同じ日に現れたのです。  
また来年も現れるやもしれませぬ」

長者

「そして翌1920年。大正9年。12月24日」

一太郎

「帰って来たぞ」

二太郎

「兄貴が帰ってきた。」

長者

「さて、倅よ。件の赤い老人とソリひく珍獣。

一太郎

「今夜も我が家に侵入してくることは明らかじゃ。どうする？」

綾町

「ひとまず綾町に結界を張らせ、その侵入を拒みましよう」

一太郎

「私の結界は、並の者には破れません」

綾町

「まずは相手がどの程度のものなのか、結界を張り確かめる。」

「その上で問いただすのじゃ。何者なのか、どこから来たのか、  
何の目的で毎年こんな、うれしいことをしているのか…」

サンタ

「（声のみ）ほーっほっほっほ…」

鈴の音色が鳴り響く。

一太郎

「来たぞ…今年も、この鈴の音色だ」

サンタ、屋根の上に現れる。

長者

「いたぞ、屋根の上じゃ」

一太郎

「綾町。結界を張れ」

綾町

「はい」

綾町、呪文を唱え結界をはる。

サンタ、入って来れない様子。

一太郎

「入って来れぬようだな」

綾町

「屋根の上をぐるぐると回っておりますな」

再び、挑戦するサンタ。やはり入れないでいる。

一太郎

「やはり入って来れぬ」

綾町

「しかし、これではつきりしました。」

長者

「やつの狙いは、やはりこの家、この家族」  
「待て。様子がおかしいぞ」

サンタ、強大なエネルギーで結界を破る。

綾町 「これはまずい。結界が破られました」  
一太郎 「並の者には破れぬはずでは？」  
綾町 「つまりは並々ならぬ者。ひとまずここは…」  
一同 「ひとまずここは…？」  
綾町 「あばよ（逃げる）」  
一同 「逃げるんかい」

サンタ、屋敷の中に侵入してくる。

一太郎

「配置につけ。弟たちは床の間、  
親父殿はとなりの部屋。」

おふくろ殿は台所」

座敷童

「俺はどうすればいいんじゃ」

一太郎

「キューピーでも抱いて隠れてる。散れ」

二太郎、三太郎、寝たふりをしてサンタを待つ。

サンタ「ほーっほっほっほ」

サンタ、二人の枕元に箱を置く。

背後より、包丁を持って忍び寄る一太郎。

一太郎

「もらったあっ」

一太郎、サンタの喉元に包丁を突き立てる。

一太郎

「動くな。これに持っているのは包丁だ。神妙にしろ」

弟ら

「さずが兄貴」

一太郎

「屋敷の平穩を荒らす不届き者め。大人しく答えろ」

サンタ

「誰だおまえは」

一太郎

「こいつ、俺のことは知らぬな…」  
「しまった、侮られた」

サンタ、妖しく動くと、弟たちが眠りに落ちる。

一太郎

「うわっ。なんだこれは、猛烈な眠気が…」

サンタの妖術で一太郎も眠気に襲われる。

一太郎

「くそっ…」

一太郎、サンタの腕を切り付け、長者のもとへ。

一太郎 「親父殿っ。表に出ろ。村の衆を集めてくれ」

村人 「長者殿の屋敷に賊が入ったぞ。すぐに村中の人間が集められた。その数、およそ数百人に及ぶ」

村人たちと長者一家、態勢を整える。

村人 「よし、突撃っっ」

屋敷に突入したが、

村人 「どこにもおらん…。もぬけのからじゃ」

一太郎 「いや、俺がこの包丁で腕を切った。

血の跡を追えばすぐに見つかるはず」

村人 「血だど？包丁に血などは付いておらんが…」

一太郎 「なに…確かに、切ったのだ。信じてくれ」

鈴の音色が響き渡る。

村人 「聞いたことも無い鈴の音色が、村中に響き渡った」

トナカイが現れる。

村人 「うわあ。鹿によく似た珍獣だー」

どこからか、サンタも現れて、  
外に残っていた女房を取り囲む。

子供ら 「おふくろさまーっ」

村人 「長者殿のワイフがピンチー」

長者 「離れておれっ。どてっ腹に鉛玉を撃ち込んでくれる」

長者、猟銃を構える。

村人 「うわー。鉄砲じゃ。伏せろーっ」

長者、サンタに鉛玉を撃ち込む。

どつと倒れるサンタ。逃げ出すトナカイ。  
村人たち、安心して倒れたサンタに近づく。

するとサンタ、すると起き上がる。

村人

「バ、バケモノじゃー。逃げろー。逃げろー」

蜘蛛の子を散らしたように逃げ去る村人たち。

長者

「その後、その赤い老人は姿を消した。とつぜん、こつぜん」

消えてしまうサンタ。

長者

「倅たちの枕元に、ちよっぴりうれしいもの、置いたまま」

三太郎

「やったー。枕元にチヨコレートじゃ」

二太郎

「枕元に香水じゃ」

一太郎

「見てくれ。俺の枕元にはアメリカ製の懐中時計。

俺が欲しかった物じゃ」

長者

「おそろしい、おそろしい、おそろしい。

が、ちよっぴりうれしいこと、起きた。今年も、起きた。

村中の人間がやつを見たが、他の家には、

こんなうれしいこと、起きていなげ。

お前たち、このことは村の衆には黙っている」

一太郎

「毎年12月25日に、欲しいものをくれる謎の老人。

その目的はまるで読めず…」

二太郎

「薄気味が悪い…」

三太郎

「兄貴たちはそう言っていたが、俺はあいつが好きだ。

こんなにうれしいことはない。うまい」

長者

「そして翌1921年。大正10年。ついに俺たちは、

やつらとのコミュニケーションに成功するのだった」

突然、僕が、物語の進行を止めてしまう。

僕

「ごめんなさい…」

長者

「どうした？平成の人」

僕

「…電話だ。妻から…」

彼女

「？ 出たまえよ」

僕

「…」

妻が現れる。

僕

「…どうしたの」

妻

「“どうしたの”…ってなんだよ」

僕

「起きたのか」

妻

「今どこにいんの」

僕

「彼女の家だよ」

『虚仮威』

彼 長者  
女

「翌1921年。大正10年。12月24日」  
「内閣総理大臣・原敬の暗殺から1ヶ月と20日後」

僕 彼女  
長者  
僕 僕

「…」  
「終わった？」  
「終わった」  
「話を戻すぞ」  
「勝手にどうぞ」

妻 僕妻 僕妻 僕妻 僕妻 僕妻 僕妻 僕妻 僕妻 僕妻

「うるせえなあ。泣くなよ。泣きたいのはこっちだよ」  
「…どうした？」  
「泣いてんだよ、マナミが。叱ったんだよ、アタシが」  
「あんまり怒鳴るな」  
「は？なんだったって？もう一回言ってみろ」  
「…」  
「なにしてんの？」  
「話きいてる」  
「なんの？」  
「…サンタクロース」  
「…ちゃんと帰ってこいよ。」  
明日はクリスマスだろ。食事会だろ。  
老い先短いお前の両親の前で、俺とお前とマナミの三人、  
仲良し家族やるんだろ」

妻、一方的に電話を切ったようだ。

僕妻 僕妻 僕妻 僕妻 僕妻 僕妻 僕妻 僕妻 僕妻 僕妻

「答えなくていいよ」  
「…」  
「マナミ起きたよ。泣いてるよ。パパがいなくて」  
「そうか…」  
「“そうか”…じゃねえよ」  
「…」  
「プレゼントどこだよ。買ってこいって言ったよな」  
「枕元にあつたら」  
「プレゼント？どこに？」  
「枕元だよ」  
「どこ？どこの枕元？」  
「マナミの、ベッドの、枕元だよ」  
「ないよ」  
「そんなはずはないよ」

突然、絶叫する妻。

一太郎 「帰って来たぞ」  
二太郎 「兄貴が帰って来た」  
一太郎 「わかったぞ。赤い老人の正体が」  
長者 「なんだと。それは誠か」  
一太郎 「この一年、東京ですつと赤い老人について調べていたのじゃ。古い文献をあたり、さまざまな寺、神社を尋ねたが、ついにわからなかった」

長者 「ふんふん」  
一太郎 「しかし、手がかりは意外なところにあった。共産党員の知り合いに誘われて、日比谷の帝国ホテルにいったのじゃ」

長者 「ホテル？」  
一太郎 「そこでは西洋式のパーティが行なわれていたのじゃ」  
長者 「パーティー？」  
一太郎 「そこにはなんと、

あの老人と同じ扮装をした者がうじゃうじゃいたのじゃ。すぐに聞いた。ワットイズデイス。それは西洋の妖怪で、クリスマスなるキリスト教の祭に現れるという。名前は…」  
僕 「サンタクロースだろ」  
一太郎 「サンタクロース…」

長者 「サンタクロース？」  
一太郎 「俺の生まれ日、12月25日は、そのクリスマス。サンタクロースなる妖怪はその前日24日夜半より家々を暗躍し、明け方までに、こどもたちの枕元にうれしい品々を届けるそうじゃ」

長者 「何もかも一緒ではないか…」  
二太郎 「そんなハイカラなものが、どうしてこの村に。どうして俺たちの家に」  
一太郎 「わからんが、聞いたはずにはいられん」  
長者 「もちろん、寝ずの番をしてサンタクロースを待った」

鈴の音色が響き渡る。

一太郎 「来たぞ。毎度、御馴染み、鈴の音じゃ。ジングルベルと言うそうな」  
長者 「いたぞ。屋根の上じゃ」

屋根の上に現れるサンタクロース。  
長者一家、丁重に屋敷の中に迎え入れる。

一太郎 「お前だな。お前のことを知っている。サンタクロースよ…キリスト教の物の怪よ…」

…メリークリスマス」

「なんだそれは？」

「挨拶じゃ。こやつらに対する友好の証じゃ。

メリークリスマス。ほら、親父殿も」

「…メリークリスマス」

「メリークリスマス」

「返して来た。メリークリスマス」

「メリークリスマス」

「メリークリスマスの文句に應えるとは、

ご高名かねがね聞き及ぶ、

サンタクローズ様であることは明らか。

となれば、あれなる珍獣は、

天駆けるソリひく赤鼻のトナカイ…」

いつの間にか、トナカイに扮した僕がいる。

一太郎

「刃物を突きつけ、鉛玉を撃ち込んだ、昨年の非礼、

どうかお許しください。我が一族は村の長者。

ここにおりますのは、父と母、出来の悪い弟たちと、

出来の良い長男です」

「自分で言うな」

「そしてこやつ（座敷童）は居候」

「居候ではない。フェアリーじゃ」

「毎年、枕元に現れては、うれしいものをくださる…

まことにありがたいことでございます。しかし、

何故そのようなことをしてくださるのか。

その真意を伺いたい。それがわかれば、こちらも

安心して受け取れるというもの」

「……」

「…我らの言葉がわからぬのか」

「それもそのはず。異国の妖怪じゃ」

「メリークリスマス」

「メリークリスマス」

「言えるんだ。これは言えるんだ」

「挨拶も済んだ。では、まあ、

しかし、動かないサンタ。

長者

「…動かん」

一太郎

「なるほど、寝なければならんようです」

長者

「なんだと？」

一太郎

「寝ているうちに物をくれるのじゃ。寝なければ駄目だろう」

長者  
サンタ  
「では、おやすみなさい」  
「メリークリスマス」

サンタ、子供たちの枕元に箱を置き、立ち去る。

一太郎  
長者  
一太郎  
「翌朝、うすうす感じていた予感が2つの中する」  
「ひとつ、サンタクローズは、我ら大人には何もくれない」  
「そしてもうひとつ、あいつは望んだ物なら何でもくれる」

子供たち、枕元の箱に気づき、

一太郎  
弟ら  
一太郎  
三太郎  
二太郎  
長者  
一太郎  
長者  
「大きな箱じゃ」  
「小さな箱じゃ」  
「見てくれ、ダイヤル式の電話機じゃ」  
まさか電話がもらえるとは」  
「やったー。ビスケットじゃ」  
「これは…ハイカラな髪飾りじゃ」  
「しかし喜んでばかりはいられない」  
「ここで大きな誤算が2つ」  
「ひとつ。立派な電話はもらったが、  
この村にはまだ電気が通っていなかった。宝の持ち腐れ…」  
「そしてもうひとつ…サンタクローズとの密やかな接触が  
山の神にバレたっぽい」

冷たい風が吹き荒れる。

村人  
「嵐じゃ。山の神様が我らをお召しじゃ」

山神と対峙する長者。

山神  
長者  
山神  
長者  
山神  
長者  
山神  
長者  
山神  
長者  
「長者よ。近頃、わしに対して、雑じゃない？」  
「いえ、そんなことは…」  
「まさかとは思うが、わし以外に誰か、  
信じ崇めるものがあるのではないか？」  
「ギクッ…とんでもない…」  
「ほんとに？」  
「ほんとです」  
「お前たち村の人間は山の恵みにより生かされておる。  
そのことを忘れるな」  
「ははー」

二太郎  
三太郎  
「でもなあ、山の神様は、ハイカラなものはくれぬしなあ」  
「俺はサンタクローズの方が好きじゃ。大好きじゃ」



一太郎

「よいか、二太郎、三太郎。あのサンタクロースは、われら子供が望んだ者はなんでもくれるのじゃ。来年はもっと大きなものを望め。」

「財産、権力、地位、名譽、思うがままじゃ」

「はっはっは…」

兄弟ら  
長者

「夢がもりもりなサンタクロースの出現で、山の神様に対して、雑になった。このことはやがて、やっべえことになる」

それを見ていた座敷童と綾町獵介。

綾町

「なるほど、サンタクロースとな」

座敷童

「望んだものは何でもくれるそうじゃ」

綾町

「よく教えてくれた。これはお礼のべっこうあめじゃ」

座敷童

「あまーい。…いや、こんなものはどうでもいい。約束じゃ。赤い老人のヒミツを教えたら、結界を解き、俺をこの家から逃がすと…」

「そんな約束はした覚えがないが？」

綾町

「畜生。殺してやる」

座敷童

「そんな約束はした覚えがないが？」

座敷童、綾町に襲いかかる。

が、綾町の術で簡単にやられる。

綾町

「お前に俺は殺せんぞ。なにしろお前は福の神」

座敷童

「福の神じゃというのに、この扱いは…まるで家畜か罪人じゃ。こんな家、早く出て行ってやる。しかし、一体どうしたら…」

はっ。そうじゃ

座敷童、長者とその女房の元へ。

座敷童

「親父殿」

長者

「お前に親父と呼ばれる筋合いはないぞ」

座敷童

「おふくろ様」

女房

「お前にお袋と呼ばれる筋合いはないよ」

座敷童

「親父殿」

長者

「なんだ」

座敷童

「俺は結界によって、この家から出られません」

長者

「そうだな」

座敷童

「この家から出ることはもう諦めました。この家で、暮らしたいと思っています」

長者

「暮らす？」

座敷童

「人並みな暮らしがしたいのです。今はただただ、奥の座敷童に閉じ込められているだけ…」

長者  
女房  
座敷童  
長者  
座敷童  
長者  
座敷童  
長者  
座敷童  
長者

「座敷童なもの」  
「座敷童に」  
「せめて、何かください。何か。家具とか」  
「さしあたって何が欲しい」  
「布団です」  
「布団だと？」  
「人が生まれてから死ぬまでの間、もっとも長く過ごす場所。それが布団。生活の基本となる、その布団が欲しいんじゃない」  
「わかった。じゃあ、お前に、布団をやらう」

布団を手に入れた座敷童。

座敷童  
長者  
彼女

「布団に枕：いいぞいいぞ：。  
あとは曆が師走に変わるを待つのみじゃ。ひひひ…」  
「そして翌1922年。大正11年。12月24日」  
「ソビエト連邦が成立する6日前」

一太郎  
二太郎  
一太郎  
長者  
一太郎  
二太郎  
長者  
一太郎  
二太郎  
一太郎  
三太郎  
一太郎  
長者  
一太郎  
座敷童  
座敷童  
一太郎  
座敷童

「帰って来たぞ」  
「兄貴が帰ってきた」  
「さあ、みんな。枕元に靴下を掲げよ」  
「靴下だった？」  
「これこそサンタを出迎える作法じゃ」  
「兄貴は東京で最先端のサンタ情報を手に入れてきた」  
「あとはどうする？」  
「手はずは万端。二太郎。もってこい」  
「おう」  
「鶏の丸焼きを用意した。これで歓迎を意を表する」  
「鶏の丸焼きとな？」  
「本来は七面鳥という鳥を焼くそうだが、この国にはおらん。なのでそれによく似ているであらう、キジを用意した。」  
「それに加えて、三太郎、もってこい」  
「おう」  
「クリスマスツリーを用意した」  
「クリスマスツリーとな？」  
「小ぶりのもみの木に金銀の飾りを施し、祝うのよ」  
「いやー楽しみじゃのう。楽しみじゃのう」  
「…ん？どうしてお前が楽しみがる？」  
「ひひひ…」

鈴の音色が響き渡る。

一太郎  
「来たぞ。鈴の音じゃ。メリークリスマス」

姿を現すサンタとトナカイ。

サンタ  
一同  
「メリークリスマス」  
「メリークリスマス」  
一太郎  
「見ろ、鶏の丸焼きに反応したぞ」  
長者  
「食べぬのか」  
一太郎  
「食べぬな。これはいわば神に対する供物。手をつけたりはせぬのだから」  
三太郎  
「もったいない。あとで僕が食べよう、と思いました」  
一太郎  
「よし、見るからに、喜んでいるぞ」  
長者  
「僕らはもう、仲良し」  
一太郎  
「これは、贈り物も期待出来そうじゃ」  
長者  
「おやすみなさい」  
一太郎  
「ん？待て待て、座敷童。どうしてお前もここで寝る？」  
座敷童  
「まあまあ。気にしない気にしない」  
サンタ  
「メリークリスマス」

サンタ、子供たちの枕元に箱を置き、立ち去る。

一太郎  
「翌朝」  
三太郎  
「やったー。ラスクじゃ」  
二太郎  
「うっひょー。ヌード写真じゃ」  
一太郎  
「俺はうなるほどの銭を手に入れた。これだけあれば、なんでもできるぞ…」

布団の周りをうろろろする座敷童。

座敷童  
「おかしい…」  
どうして俺は何ももらえないのじゃ…  
この家のこどものフリをしたのに…ちゃんと布団で寝たのに…  
「人間じゃないからだろ？」  
一太郎  
「人間である前に子供じゃ。お前らよりもずっと子供なんだぞ。サンタクローズ…その程度かっ」  
長者  
「そもそも何が欲しいんじゃ」  
座敷童  
「火箸じゃ。長い火箸じゃ。それを使ってあの札を外し、境界を破り、逃げ出そうと思っていたのじゃ」  
長者  
「それは妙案じゃのう…ってさせるか（羽交い締めにする）」  
「ところで、一太郎」  
一太郎  
「この鶏の丸焼きはどこで買って来たんの」  
「買ってはおらん」  
女房  
「時間がなかつたから、山から獲って来た」  
「…なんですって」

一太郎 「丁度よくキジが飛んでいたのだな」  
女房 「じゃあ、この、モミの木は……」  
一太郎 「裏の山より取ってきた」  
長者 「山の神の許しも得ずに、か」  
一太郎 「……」

冷たい風が吹き荒れる。

村人 「嵐じゃ。山の神様が我らをお召しじゃ。  
長者 「何が、世界征服じゃ。」

東京なんぞに行つて見聞を広げているつもりだろうが、  
何もわかつておらん。大切なことを  
何もわかつておらん」

山神と対峙する長者。

「お前の倅か」

「……」

「お前たち人間とは、仲ようやって来たつもりじゃ。  
持ちつ持たれつ、助け合い、苦しい時代を乗り越えて来た」

「……」

「その長い歴史から考えれば、たかがキジ一匹。もみの木一本。  
小さい事かもしれん。が、わしは山の命を司る神じゃ。」

許すわけにはいかぬ」

「……」

「なぜ、このようなことをした。」

やむにやまれぬ事情があったのなら、申してみよ」

「山の恵みに無断で手をつけたのみならず、

それを異国の神に捧げるなど……激しい怒りを買うことは必定。

村」と滅ぼされかねぬ……」

「話せぬか。ならば、仕方あるまい。」

倅の命を山に差し出せ。

鳥や獣や草や木や、森羅万象の命よりも

人間の命が重いという、

お前らの傲り高ぶった考えを改めてくれる」

「……」

「出来ぬか？できぬならば、長者、

お前が代わりに死ね。

それがいやならば、倅を殺せ」

二太郎

「この時のことを今でも考える。  
どうして親父は、言わなかったんだろう。  
自分が兄貴の身代わりになるって

どうして兄貴は、言わなかったんだらう。  
親父の代わりに自分がって。  
二人とも黙ったまま、じっと動かない。  
お互いが名乗り出るのを：死ぬのを待ってるみたいだ。  
結局、よくわからない終わり方を迎えた」

三太郎 「あの、僕で良ければ…」

一太郎 「三太郎…」

三太郎 「あの鶏、ほとんど僕が食べちゃったし。いいよ。僕が死ぬよ」

長者 「しかし、それは…」

三太郎 「だって、二人とも、死にたくないんでしょ？」

二太郎 「親父も兄貴も、黙っていた」

三太郎 「じゃあ僕が死ぬよ。神様、それでいいだらう」

三太郎の呼びかけに応える山神。

山神

「お前の命、この山がもらい受ける。  
怖がらなくていいぞ。」

お前の体は山の一部となるのだ」

山神、三太郎の命を奪う。

二太郎

「弟が死んだ。」

山に捧げた命は一族の墓には入れない。

弟はそのまま、山に埋められることになる」

女房

「三太郎。お父さまとお兄さまの為に死ぬなんて…  
なんて優しい子だったんだらう…」

二太郎

「そりゃ言い過ぎだ。」

あいつは優しいんじゃないやなくて、ちょっとバカなんだ。

バカと優しいは紙一重。賢いとズルいも紙一重。

親父と兄貴は賢くて…まあ、ズルいんだらう」

長者、綾町を呼びつけ、

長者

「綾町。仏法の心得はあるか？」

綾町

「高野山で修行したことはありません。二、三日だけです…」

長者

「三太郎の供養をしてくれ。」

一太郎

「銭は、ここにあるだけ、もっていけ」

長者

「親父殿。それは俺がサンタクロースからもらった銭じゃ」

一太郎

「そのサンタクロースの為に三太郎は死んだのじゃ。」

一太郎

「これは三太郎の銭だ」

一太郎

「この銭は、生きている者の為に使うべきじゃ。」

長者  
「供養など何の足しにもならん」  
「いま、何と言った？」

一太郎  
「東京で、人の心も失ったか」  
「親父殿。俺は何も間違った事は言っておらん。  
三太郎が死んだ事は悲しいが、この銭は、  
家族の幸せのために……」

長者  
「幸せだと？お前に幸せの何がわかる」

長者  
「わかっておる。俺は、生まれながら、  
幸せではないからな」

女房  
「一太郎っ」

二太郎  
「……兄貴は何を言ってるんだ。長男として生まれ、頭も良く、  
これ以上の幸せはないだろうに。」

親父と兄貴はこの日以来、言葉を交わす事が減った。  
おふくろ様は弟を失ったせいで、気がふれてしまった」

それを聞いていた僕の表情が暗いので、

二太郎  
「……あ、ごめん。」

「なんか、暗い話題になっちゃったね」

僕  
「そりゃ暗くなるよ」

二太郎  
「弟は綾町が供養した。」

僕  
「弟は……まだ12歳だった」

僕  
「そりゃ暗くなるよ」

二太郎  
「最期の言葉は、うぎああああ、だった。」

僕  
「体中から血を流しながら……」

僕  
「もういいよ。違う話してくれ」

二太郎  
「うん。その間も、俺は、村中のブスを抱きまくった」

僕  
「興味ないよ。なんだよその話……」

二太郎  
「大丈夫。すぐに明るい話になるから。」

それからまるごと一年後。

1923年。大正12年。12月24日」

一太郎  
「帰って来たぞ」

二太郎  
「兄貴が帰って来た」

一太郎  
「よいか、二太郎。あのサンタクロースは、  
われら子供が望んだ物はなんでもくれるのじゃ」

二太郎  
「そうだね」

一太郎  
「俺は今年は、機関銃を望んでみようと思う」  
「機関銃？」

「十一式軽機関銃。帝国陸軍でも採用されているものじゃ。  
世界征服への第一歩、たしかな武器を手に入れる」

二太郎 「その武器でどうするんだい？」  
一太郎 「いよいよ事をおこそうと思う。この国はダメじゃ。

二太郎 ロシアでは革命が成功し、  
中国では共産党が力を付けているというのに、  
帝国じゃ大国じゃとおごるばかりでなにもしておらん。  
関東大震災の混乱に乗じ…やるぞ革命、クーデター」  
二太郎 「東京に行って6年。

一太郎 兄貴はバチバチに危険な思想家に仕上がっていた」  
二太郎 「滅びの日は近いぞ」  
一太郎 「兄貴の言ってることは何もかもわからねえな、  
と言ってくれる弟はもういない…」  
一太郎 「俺も今年で17歳。中学校も卒業じゃ。

長者 いよいよ俺が、この国を手に入れる為に  
一気に入く時が来たのじゃ」  
長者 「お前は、いつも大きな声で、大それたことばかりを言う。

一太郎 大きなことしか言えないのか。ちっほけなことを物語れば、  
自分まで小さくなる気がして怖いのだろう。

二太郎 「何を言ってるんだ、親父殿は。」  
二太郎 よ。お前は、何を望む？」

一太郎 「さあ、何も考えてないけど…」  
二太郎 「だったら、戦車を望んでくれ。  
そしてそれを俺にくれ」

二太郎 「えー。いやだよ」  
一太郎 「いいから望め。長男命令じゃ」

二太郎 「えー。いやだよ」  
一太郎 「いいから望め」  
二太郎 「戦車なんて、あいつら用意出来るの？  
枕元にもおけそうにないし…」  
一太郎 「いいから望め。やるぞ革命クーデター」

二太郎 「兄貴はまるだしの欲望をぶつけて来たが、  
俺には欲しい物があつたんだ。  
…と考えるうちに夜になった」

鈴の音色が響き渡る。

二太郎 「ようこそサンタクロースさん…」

サンタ登場、と思いきや、現れたのは三太郎。

三太郎 「わあ、懐かしいなあ」  
一太郎 「三太郎っ」  
二太郎 「こんなところで何をしているっ。」

三太郎

「お前の魂は、綾町がちゃんと供養したはずだぞ」

三太郎

「たしかに僕は成仏した。そして、サンタに憧れる気持ちから、サンタクロースとして転生したのさ。名前もサンタ、ろうだし。いいんじゃないかな」

「よし。受け入れる」

三太郎

「メリークリスマス」

三太郎

「こちらは先輩です」

三太郎

「先輩……」

三太郎

「こんばんは、って言ってます」

三太郎

「わかるの？言葉」

三太郎

「わかります。家族だからね」

三太郎

「完全に向こう側じゃん……」

一太郎

「三太郎。どうしてうちに来たのか、そのわけを聞いてくれんか」

三太郎

「はい」

三太郎、奇怪な言語でサンタに尋ねる。

サンタも同じような言葉をしゃべりだす。

以降、三太郎はサンタの同時通訳する。

三太郎

「（同時通訳）私たちに対して理解を深めようという姿勢に

大いに感謝しています。この国の文化や歴史の中で

生きて行きたいということは私たちの願いです」

長者

「同時通訳……」

三太郎

「（通訳）この国には、明治時代に入り、

信教の自由が保障された時にやって来ました。

しかし、文明開化の流れの中で、

クリスマスやサンタクロースというものは単なる

ハイカラな趣味として受け入れられるのみに留まり

その本来の意図、またサンタクロースの実在性については、

深く検証されることはありませんでした。非常に残念です。

私たちは、いまだ急速な文化改革の起こっていない土地で、

サンタクロースとして本来の活動を行い、

信じてもらいたい、というのが狙いです。

この家は、そんなサンタクロースモニターの

第一号でもあります」

三太郎

「モニター？」

三太郎

「（通訳）日本人が、サンタクロースから



贈り物をもらうとどうなるのか。  
もらった上でどれくらい信じるのか。  
その調査研究の対象ということですよ」

二太郎 「いずれは日本中の家庭に届けるんですか？」

三太郎 「（通訳）もちろん。私たちは

世界中のこどもたちに届けてきました」

二太郎 「世界中だったって、まだ日本中にだって届けてないくせに」

三太郎 「（通訳）それは、この国がまだ、

世界の一部じゃないってことなんです」

一太郎 「その世界とやらは、やがて俺が牛耳ってやろうと思っている。

俺の智慧と、お前からもらった道具の数々、

家族の絆で持っていて、まずはこの国を支配する」

三太郎 「（通訳）あなたの言ってることは何もかもわからねえなあ、

とサンタも言っています。

一太郎 「その為にも、サンタ。協力してくれ。俺が望む物をくれ」

三太郎 「（通訳）本来は寝ている子供に差し上げるのですが、

特別に、サンタクローズじきじきにお渡ししましょう。

長者 「おい、我ら大人はもらうことは出来ぬのか？」

三太郎 「あ、それはムリです」

サンタ 「メリークリスマス」

子供たちに、プレゼントが配られる。

一太郎 「やった！これこそ望んだ品。十一式軽機関銃」

やっぱりもらえない座敷童。

座敷童 「（三太郎に）おい：：どうして俺は何も貰えないのじゃ」

三太郎 「その家の子供じゃなきゃ、あげられないんだ」

座敷童 「じゃあ：：この家の子供になってやる。

（女房を見つ）母さん、お肩を叩きましょう」

長者 「（女房を守りつつ）お前に叩かれる筋合いはないぞ」

一太郎 「二太郎。お前は何を望んだ。戦車か。戦車を望んだのか」

二太郎 「兄貴：：世界征服は兄貴が勝手にやってくれ。

俺は俺の好きなように生きたいのじゃ」

二太郎、箱の中身を取り出す。

一太郎 「：：なんだそれは？」

二太郎 「キュウリじゃ」

一同 「キュウリ？」

二太郎 「夏にとれる野菜だが、こんな真冬に手に入るとは。

一太郎 「まさにクリスマスの奇跡……」  
「お前、そこまで食い意地が張っていたのか。たかがキュウリの為に、年一回のうれしいことを使うとは。キュウリなんて……夏になればいくらでも食べられるだろう」

二太郎 「違う、違う。食べるのではない。これを使って、女を口説くのよ」

一太郎 「……女？」

二太郎 「女じゃ、女じゃ。河童の女じゃ」

一太郎 「……弟の言ってる事は何もかもわからねえな」

二太郎

「村中の女を抱いて、俺は悟ったのだ。人間の女は一度抱けばだいたいわかる。

わかれば飽きる。飽きると情も何もなくなってしまう。

しかしじゃ。人間じゃないものならば、河童ならば、

その刺激と興奮に終わりは無い。

飽きる事無く、愛を育む事ができる。

そう思った俺は、数年前より、川に行き

河童をナンパし続けて来た。そしてついに、

これぞという河童の娘と会った。

しかし、そこは河童。どうしても俺の愛を受け入れくれぬ。

なびかぬ心は物で釣る。

やつらの好物であるキュウリをこの冬に手に入れ、

手土産にしようと考えたのじゃ」

一太郎 「お前……何言ってるんだ。さつきから」

長者 「そもそも河童のどこがいいんじや」

二太郎 「いい。何もかもいい」

長者 「いや……だって……河童だぞ？」

二太郎 「親父殿は、河童を抱いたことがないから

そんなことが言えるのじや。

井の中の蛙、大海を知らずとはこのことじや」

「いや……お前はちよっと……大海を知りすぎた」

「兄貴ならわかってくれるであろう。」

東京に行き、いろいろな女を抱いて来た兄貴なら」

「いや……」

「なんじや？」

「そもそも俺は……女を知らぬ」

「えーっ。東京に行ったのに？えーっ。東京に行ったのに？

東京では今流行りのモダンガールを抱き放題のはず。

それなのに、やってないの？」

「うるせー（殴る）」

長者 「二太郎と河童一族との縁談は……とんとん拍子に進んだ」

妻 「うえーん」

二太郎 「村一番のドラ息子も、今や河童の婿養子。おさまるべき所におさまった。もうこの家でサンタクロースから物をもらえるのは兄貴だけだ。兄貴。兄貴も本当に欲しいものを望みな」  
一太郎 「本当に、欲しい物…」

二太郎、河童たちに連れられて、去っていく。

女房 「年に一度でも、会えるんだね。良かった」  
三太郎 「おふくろ様は俺との再会を嬉しがってくれたが、俺は何も感じなかった。もう完全に、サンタ側の存在になっちまったようだ」  
女房 「うえーん」

それを見ていた座敷童。

座敷童 「家族とはなんじゃ。どうしたら家族になれるのじゃ。血のつながりなくては家族にはなれんだろうし、血のつながりだけでも家族とは言えぬだろうし…」  
三太郎 「それは僕にもわからないけど、たしかなことはひとつある。とにかく、つながりだ。心でも体でもなんでもいいから繋がりが合えば、君もきつと家族になれるよ」  
座敷童 「家族かあ。しかしこの家はどうなっている？ 東京、河童、サンタクロースと、家のガキどもは散り散りばらばら。こんなものでも家族と呼べるのか…？」

女房 「ねえ…」  
座敷童 「なんだよ」  
女房 「こっちで一緒に寝ないかい？」  
座敷童 「おい。俺は福の神じゃぞ。フェアリーじゃぞ。子供のいなくなったお前のさみしさを紛らわす、都合のよい者ではない」  
女房 「そ、そうね。ごめんなさい…」  
座敷童 「…まあ、そちらの布団もあったかそうだ。行ってやらんこともない」

女房の布団に潜り込む座敷童。

三太郎 「おふくろ様には苦勞と心配ばかりをかけてしまったが…」

僕はサンタクローズとしての務めを果たし、  
日本中の子供たちを幸せにするよ」

いつの間にかいた綾町獵介。

綾町 「素敵なお言葉ですな。サンタクローズさん」

三太郎 「あれ？綾町」

綾町 「望むものを何でも取り出すその力。お見事です。  
私も是非、お仲間に入れてほしいと思ひましてね。  
どんな修行をすればいいのでしょうか？」

三太郎 「修行はいりません。」

綾町 「子供たちを愛する気持ちがあればなれます」

三太郎 「しまった：私は子供どころか、  
人間という者にまったく興味がない」

綾町 「それじゃ無理だ：諦めて」

三太郎 「三太郎。俺はお前の供養をしてやったのだぞ。  
その恩は忘れておらぬだろう」

綾町 「その節はどうもありがとう」

三太郎 「どうだ、ひとつ俺に：喰われてくれぬか」

綾町 「え？くわ：？」

三太郎 「サンタクローズをまるごと平らげれば、  
その力を得られるやも知れぬ」

綾町 「じよ、冗談だろ：」

三太郎 「本気だ」

綾町 「いやだよ。いやだ。だって僕は：」

三太郎 「なんだ」

綾町 「：僕の手で兄貴に渡したいんだ。」

三太郎 「兄貴が本心に欲しいもの。この世界をね」

綾町 「あいつは、世界なんて欲しがっておらんぞ。  
世界を欲すると誓う事で、

三太郎 「大人物である事を示したいだけじゃ。俺は違う。  
俺は本当に世界が欲しいのじゃ。  
大人しく喰われろ」

綾町 「いやだよ。いやだ。僕は食いしん坊だ。  
食べるのは好きだが、食べられるのはごめんだ」

三太郎 「ならばどうしてそこにいる」

綾町 「え？」

三太郎 「そこは俺の：術式の間合いじゃ」

綾町 「なにっ？」

三太郎 「はあああっ」

綾町 「はあああっ」

綾町が術を繰り出すと、三太郎の体が動かなくなる。

三太郎  
綾町  
三太郎  
「か、体が……」  
「いただきまーす」  
「うわああああ」

綾町、三太郎に噛みつくろうとする。  
そこへサンタクロースが助けに来る。

サンタ  
三太郎  
綾町  
サンタ  
「ほーっほっほっほ」  
「先輩……」  
「おお。古株が出て来たか」  
「メリークリスマス」

サンタ、妖術で綾町の体を吹き飛ばす。

綾町  
三太郎  
綾町  
「くっ…結果は破られはしたが、  
悪魔払いこそ俺の本命。覚悟せよ」  
「おい、サンタさんは悪魔じゃないぞ」  
「大和の国においては、  
お前らはまだまだ、妖怪の類い。  
焼き殺してやる。はあっ」

綾町、術を繰り出す。  
サンタクロースの体が炎に包まれる。

サンタ  
三太郎  
「メリー…クリスマス…」  
「先輩っ」

焼死するサンタ。腰を抜かしてしまう三太郎。

綾町  
「くたばれ、三太郎」  
突然、冷たい風が吹き荒れる。  
山神が現れる。

山神  
綾町  
山神  
「そこまでじゃ綾町。  
三太郎の命はこの山の神がもらい受けておる。  
手出し無用じゃ」  
「死に損ないの山神め。邪魔はさせん」  
「山を乱す妖術使いめ」

山神と綾町の幻術合戦が始まった。  
村人が客席におどり出る。

村人

「（客席に）みんな…大丈夫？  
話の展開…ついて来てる？ よっしゃ、俺が説明したるわ」

村人が状況を説明。突然の爆発音。  
あたり一面、焼け野原となる。

むくりと起き上がる綾町。

綾町

「…このカラダはもう、使い物にならぬ…。  
ニンゲンは、もろくていかん。  
覚えておれよ…」

綾町、消え去る。

体が燃え尽きている山神。

山神

「最後の最後まで、好かぬやつじゃった…」

三太郎

「すみません、神様。」

山神

あの僕、勝手に西洋の妖怪になっちゃいました…」  
「よいのだ三太郎。それも世の流れ。」

三太郎

今は大正デモクラシー。新しい時代へと突き進んでいる。  
この山に神がいたことなど、やがて人々は忘れるだろう」

山神

「神様…」

三太郎

「わしがいなくなった後の世は、人々の心を  
お前が救うのだ」

三太郎

「山の神は静かに息を引き取った」

現れる一太郎。手には地球儀。

一太郎

「ふざけるな。俺が望んだのは、この世界だぞ」

三太郎

「翌1924年。大正13年。12月25日」

一太郎

「なんだ、これは。地球儀ではないか。これのどこが世界だ」

三太郎

「でも、欲しい物のイメージが、それだったから…」

一太郎

「地球儀など、欲しくない」

三太郎

「漠然としていちゃダメなんだよ。」

一太郎

もっとはつきりとした願いじゃないと、  
サンタクロースは届けられない。きつと兄貴は…」

三太郎

「なんだ？」

一太郎

「兄貴の考えてる世界ってのが、ぼけてるんだと思うよ」

三太郎

「ぼけてる？」

一太郎

「世界って、兄貴が思ってるよりもっと複雑なんだよ」

三太郎

「尋常小学校しか出ていないお前が、俺に説教か」

一太郎

三太郎 「兄貴。もっと考えてよ。本当に欲しいもの。本当に望んでいる物の姿。兄貴の中にそれがないと渡せない」

一太郎 「……」

そこへ座敷童がやってくる。手には小さな箱。

座敷童 「おい、俺にもくれるのか？ どうしてじゃ。

この家の子供になった覚えは無いぞ」

三太郎 「この一年。おふくろ様は君を家族のように扱った。君もそれに応えた。その証だよ」

座敷童 「やった…火箸じゃな？ 火箸じゃな？

この火箸で結界を外せば、この家とも、今日でおさらばじゃ」

座敷童、箱を開けると、

座敷童 「…なんじゃ、こりゃ。これは…カルタ…」

三太郎 「みんなと遊びたかったんだよね？」

座敷童 「うるせえっ…火箸じゃ。火箸をよこせ。

三太郎 「いや、だって、本当に望んでたんだろ、これ」

座敷童 「…カルタなんて…カルタなんて…まあ、仕方ない。せっかくもらったのじゃ。遊んでやってもいいぞ。火箸はまた来年じゃ。おふくろ様。やりましょう」

一太郎がいきりたっている。

一太郎 「あと何十年かしてみろ。川なんて無くなっちまうんだぞ。そうなりや河童は全滅だ」

三太郎 「翌1925年。大正14年…」

女房 「もうやめなさい、一太郎」

二太郎 「言わせてやれ。童貞の戯言じゃ」

一太郎 「川はあちこち埋め立てられ、野山はダイナマイトで粉微塵。

何もかもみんな無くなって、人間様の作った村だの町だらけになるんだよ。

二太郎 そんなところでお前ら河童はどうやって生きるんだ」

「川が無くなりや河童はお陀仏だ。

だが、川も山も谷も森も原っぱも、みんな無くなったそんな場所じゃ、人間だって生きちゃいけないだろう」

一太郎 「そうさ、生きちゃいない。死んでいる。殺されるんだよ、村や町ってやつに。」

それが集まった国ってやつに。  
村や町や国を生かす為に人間は働かされるんだ。  
俺はそんなのごめんだ。  
かつて神々が国を生みだもったように、  
俺は俺の世界を作るのじゃ」

一太郎、箱を開ける。

三太郎 「その年：兄貴はサンタクロースから何ももらえなかった」  
二太郎 「箱の中身は空っぽだったんだ」  
三太郎 「本当に欲しいものを自分で見失っている」  
二太郎 「望むことを恐れている」

一太郎 「……うろたえるな、惑わされるな。  
この世界を手に入れる。そして世界の王となれ。  
それが何よりの……親孝行じゃ」

二太郎 「そして、世界征服の誓いからちようど10年。  
翌1926年。大正15年。12月25日」

鈴の音色とともに、屋根の上に姿を見せる三太郎。

一太郎 「もう何度目かのジングルベルじゃ。  
二太郎 「世界征服など、大それたことを言っただけだが、  
あの血判状はハツタリではあるまい」

一太郎 「……」  
二太郎 「財産。権力。地位。名誉。望めば何でも手に入る。  
サンタクロースの名にかけて、望んだ物は一体なんじゃ？」

三太郎、一太郎に箱を差し出す。

二太郎 「なんだその箱は。それに世界が入っているってのか？」  
三太郎 「中身は僕もわからない。  
開けるまでは、貰う本人の気持ち次第で何にでもかわる……」

その様子を見つけている彼女。と僕。

彼女 「家族みんなが見ている前で、  
そのプレゼントは開けられたとさ」  
僕 「そこには、何が入っていたんだ？」  
彼女 「ウェディングドレス。だよ」

現れる純白のウェディングドレス。驚く一同。



一太郎 「…」  
二太郎 「兄貴、どういふことだ」  
三太郎 「ただのドレスじゃない。」  
一太郎 「これはウエディングドレスっていつて、その…なんだっけ？」  
二太郎 「…西洋の白無垢じゃ」  
一太郎 「なるほど。嫁が欲しいということか？」  
三太郎 「しかし、これと世界征服と、どういう関係が…」  
一太郎 「違う。これは違う。」  
三太郎 「俺はこんなものは望んでいない」  
二太郎 「サンタクローズには、本当の心しか伝わらないから…」  
一太郎 「うそじゃ」  
三太郎 「本当の心って…この洋服が…？」

発狂する女房。

女房 「ごめんなさい…一太郎」  
一太郎 「何を謝るっ…」  
女房 「そうだったのね…ごめんなさい」  
一太郎 「だから、何を謝る。おふくろ様…」  
女房 「出来の良いあなたに甘えて、何も知ろうとしなかった」

一族全員の姿が溶解する。  
そこから這い出る三太郎。

三太郎 「サンタクローズってのは世界中に何千人もいるらしい。ただ、それぞれを区別する必要がないから、名前は無い。一人がみんな、みんなが一人、それがサンタクローズだ。サンタクローズになつてから、いろいろなことわかったけど、わからないことはずっとわからなかった。どうして、サンタクローズは、僕の家に来たんだろう。偶然だとしたら、へんな家にあつたものだ。でも、どうやら、偶然じゃないらしい。声が出たんだってさ。「助けてくれ」って。僕は間違つてた。サンタクローズが初めてうちに来たのは、兄貴が11歳のときで、最初は鉛筆をくれたんだと思つてた。違ふんだ。サンタクローズがうちに来たのはこの一年前。僕らへの最初のプレゼント。それは鉛筆でも、ドーナツでも、山高帽でもじゃなくて…」

場面は10年前の床の間に。

一太郎 「血じゃ。血がぎょうさん流れた。」

1916年。大正5年。12月24日。  
10歳の誕生日を翌日に控えた、俺の布団は血で汚れた。  
なんじゃこりゃああああ。10年間の長きに渡り、  
偽り続けてきた心を偽らざる体が暴いた。  
しまった。もうこれ以上…自分を騙せない。やはり、俺は…」

現れる長者。

長者 「1906年。明治39年。女房に一人目の子を生ませた日」  
一太郎 「そうか、俺はまもなく生まれるのか」  
綾町 「生まれてくる子供は男ですぞ」  
長者 「五日前に受けた怪しい修験者の予言は、  
少なからず俺を喜ばせた」  
一太郎 「親父殿は、なにやら喜んでる」  
長者 「男であろうが女であろうが、もちろん大切に育てる」  
一太郎 「どちらで生まれてくるかなど、それは自分では選べない」  
長者 「しかし、男であれば、男であれば  
この家も安泰というものじゃ」  
一太郎 「なるほど、それこそ親父殿の望み。  
男に生まれる事こそ、何よりの親孝行」

赤子を抱えた産婆が現れる。

産婆 「女子じゃ。女子じゃ」  
長者 「女…」

屋敷の天井から長者の父親の幻影。

父親 「なんじゃ。女か…」  
長者 「女…」  
父親 「女など、外に嫁に出すだけじゃ。なんの足しにもならんぞ」  
長者 「女…」  
父親 「どうした。せめて赤子を抱いてやれ。  
女房殿にねぎらいの言葉をかけてやれ」  
長者 「うるさい…黙れ…」  
父親 「お前はやっぱり、俺の息子じゃ。  
なんのかんのか言うたって、お前は俺と同じ。  
腹の底では思っているのじゃ。女など要らぬとな」  
長者 「女…」

見つめ合う長者と一太郎。

一太郎 「俺は…いらぬ命なのか。」

長者 「生まれてはいけなかったのか、親父殿」  
「何を言っている。俺は男兄弟に生まれたのだ。  
女の子が欲しいと常々思っておった」  
一太郎 「はつきりと、俺の目を見て言ってくれ。  
俺は…いらぬ命であろう」  
長者 「……」

縄で拘束された綾町が現れる。

綾町 「生まれましたか。男でしたでしょう」  
長者 「こやつ…生まれてくるのが女と知って、  
あえて男と予言したか…」  
綾町 「男でしたでしょう」  
長者 「女じゃ。…そう言ってくればよかった」  
一太郎 「そう言ってくれ」  
長者 「待て。俺は、長者と呼ばれているが、  
親父の家屋敷を継いだばかり。二十そこそこの若造じゃ。  
村の衆も、いつ心変わりするかわからぬ。  
家に女が生まれたとあつては、いらぬ侮りを受ける」  
一太郎 「親父殿…」  
長者 「家を守るため、ひいては村を守る為。こいつは…」  
一太郎 「親父殿」  
長者 「男として育てよう。  
なあに、他に男が生まれたら、すぐに女に戻す。  
戸籍など、すぐに書きかえられる。  
役場の人間はどいつもこいつも、うちの小作じゃ」  
一太郎 「わかる、わかるぞ親父殿。それは、  
俺を可愛いと思うが故のハツタリじゃな。  
俺を守る為の、大嘘じゃな。  
村中の人間に言ってくれ、立派な男子が生まれたと」

産婆の手により赤ん坊が取り上げられる。

産婆 「二人目は男の子じゃ」  
長者 「一太郎。面倒を見てやれ」  
産婆 「三人目も男の子でした」  
長者 「一太郎。面倒を見てやれ」

長者と女房。

女房 「いつになったら…一太郎を女に戻すのです」  
長者 「いつでも戻せる…」  
女房 「いつになったら…一太郎を女に戻すのです」

長者 「いつでも戻せる…」  
女房 「いつになったら… 太郎を女に戻すのです」  
長者 「いつでも戻せる… その甘い思いが仇となり、  
いつまでも、いつまでも戻せなかった」

父親 「いつまでも戻すな。  
女など、なんの足しにもならんぞ」

一太郎 「俺は弟たちとは違う。俺は望まれていない命なのじゃ」

長者 「いつになったら、あいつを女に戻そうか…」  
一太郎 「毎夜、親父殿とおふくろ様がそう語るのを聞きながら育った。  
いやじゃ。女はいやじゃ。女に戻るといふことは、  
俺が生まれてきた意味がなくなるといふことじゃ。  
いやじゃ、女はいやじゃ」

長者 「1916年。大正5年。12月24日」

そして、再び10年前の床の間に。

一太郎 「血じゃ。血がぎょうさん流れた…」

産婆の幻影が現れる。

産婆 「いつか、血が出る日が来るだろう」

一太郎 「産婆殿。俺のことは他言無用」  
産婆 「わしが黙っていても、お前の体は自然と語りだす。  
自分が女であると。それこそまさに命の理。

お前の心が男であることを望んでも、  
お前の体は女であろうとする」

一太郎 「…どうしたらいい」  
産婆 「どうにもならぬ」

一太郎 「この心と…

この体…

誰か…

助けてくれ…」

鈴の音色。

ゆっくりと現れるサンタクロース。

一太郎の体を、愛おしそうに抱きしめる。

一太郎 「震えながら眠りについた。

明け方、枕元に置いてあったのは  
見た事も無い刺繍のハンカチーフ。  
これは女物：誰がくれたのじゃ。  
親父殿か、おふくろ様か、誰でもよい。  
誰かが知ってくれている。  
誰かが思ってくれている。  
誰かが見守ってくれている。  
それだけで救われた。  
俺の苦しみは、俺だけのものではない」

そこへ長者がやって来てしまう。

長者 「そこにいるのか、一太郎」

一太郎 「親父殿か」

長者 「いつまで寢床にこもっておる。

早く起きてこい」

一太郎 「入らないでくれ。待ってくれ」

長者 「ここは俺の家で、お前は俺の倅。

指図される覚えは無い」

一太郎 「そこを曲げてお願い申す。

しばし待たれよ親父殿」

長者 「何を待つ」

一太郎 「俺が終いまで書き記すのを」

長者 「書き記すとは」

一太郎 「血判状じゃ」

長者 「けっぱんじょう？」

一太郎 「今日12月25日は俺の生まれ日。

俺も今年で10歳じゃ。

己がどのように生きたいと願っているのか、

その偽らざる心根をこのふすまに書き記した。

親父。おふくろ。弟たちよ。見てくれ」

一太郎、経血でふすまに文字を書く。

一太郎 「俺は誓う。

今日より10年のうちに

この天土の狭間にある全てを我が手中におさめる。

天下をまるごと乗っ取り、一族の繁栄、

家族の幸福を実現してみせる。

大正5年12月25日：」

経血で血印。血まみれの手を見つめながら、

一太郎

「俺はいつまでも、とこしえに、男として生きてやる。俺は男じゃ。長男じゃ。一族の頭領、大黒柱。立派な男じゃ。いつまでも、男として生きて行くぞ。いついつまでも、とこしえに、千代にやちよに、さざれ石の、巖となりて、こけのむすまで、こけおどし…」

しかし、その傍らには、ウェディングドレス。

一太郎

「…なにが世界征服じゃ。見てくれ親父殿。サンタクロースの前では何も隠せんかった。そうじゃ、このヒラヒラしたもんはウェディングドレスというものじゃ。西洋の白無垢じゃ。銀座の百貨店でたまたま見かけたのじゃ。親父殿。お前の長男は大バカじゃ。これを着て嫁に行く、己の姿を夢見てしまったのじゃ。東京に行き、学問を修め、見聞を広めた挙げ句がこれじゃ。平塚雷鳥が女の解放の為に戦い、幸徳秋水が大逆事件で倒れ、治安維持法のもとに共産党員がバツバツと死んで行った。大正デモクラシーの真っただ中、サンタクロースをも巻き込み世界征服を企んでいた俺は、ただただ、キレイな花嫁衣裳に憧れるだけの平々凡々な女だったのだ。1926年。大正15年。二十歳の誕生日に、望んだものが…これか」

ウェディングドレスの前に跪く一太郎。  
それを見ながら長者、

長者

「…いいんだよ。それで、いいんだよ。何が悪いんじゃ。だってお前は女だろ。キレイな姿を夢見て何が悪いんじゃ。お前に、女らしいものを何一つ買ひ与えなかった父を許してくれ。月のものが来た時のハンカチから、嫁入りのウェディングドレスまで、何から何までサンタクロースなんぞに用意させた父を許してくれ。二十年も遅れてしまったが、今こそ認めよう。一太郎…お前は…女だ」

一太郎のもとへ駆け寄る弟たち。

二太郎  
一太郎  
二太郎

「兄貴。兄貴は女だ。かわいいよ」  
「うそつけ。どこが可愛い」  
「俺にはわかる。」

古今東西の美女ブスあばずれ、巨乳貧乳ロリ年増。  
挙げ句の果てには河童まで。

あらゆる女を抱いて来た俺にはわかるのだ。  
女である自分を殺しながら、  
それでも殺されなかった女な部分を持つ兄貴はかわいいよ。  
世界一かわいいよ」

一太郎  
三太郎  
一太郎  
三太郎

「うるせー。うれしー。相反する感情がー」  
「兄貴。俺たちのために、立派な兄貴でいてくれてありがとう」  
「うるせー」  
「兄貴が立派な兄貴でいてくれたから、  
俺たち弟は自由な人生が送れたんだ。」

一太郎  
三太郎

俺はサンタで、こいつは河童の婿養子。幸せだ」  
「うるせー」  
「もう兄貴も幸せになっていいんだよ。  
何がしたいんだ。言ってごらん」

長者

「お前に、日本一の婿を探してやるからな。  
おい、お前。もうこいつは二十歳だだよ。  
嫁としては行き遅れだが、女としては  
まだまだまだ生き始めたばかりじゃ」

一太郎

「俺は…俺は…」

そこへ飛び込んでくる村人。

村人  
長者  
村人

「おーい。みんな。大変じゃ。現に大変じゃ」  
「どうした」  
「天皇陛下が…お亡くなりあそばせたぞ」

一同、起立。皇居の方角に黙禱を捧げる。

二太郎

「1926年。大正15年。12月25日。  
大正は昭和と改まり、兄貴は姉貴に改まり、  
サンタクロースは二度とうちには姿を見せなくなった。  
我が家の10年間に渡る

サンタクロースモニターとしての役割も終わったのだろう」

長者

「二度と来るな、サンタクロース。  
俺はこの家の主じゃ。倅たちには、娘には、

俺がものをくれてやる。  
こどもたちが望む物など、俺が一番良く知っているんだ。  
この国の父親どもから、その役目を奪うな。  
12月24日。首を洗って待っている。俺は必ず会いに行く。  
お前が用意するものよりも、もっと  
うれしいものを用意してやるからな」

劇中人物が、ひとり、またひとりと消えていく。

一太郎

「俺は…俺の世界を手に入れたい。  
男でもない。女でもない。俺だけの世界を」

三太郎

「兄貴。無理にとは言わないが…  
子供を生んでくれたらうれしいな。俺、会いにいけるから。兄貴  
の子供に会いに行くっていう名目で、  
兄貴にも会いに行けるから」

座敷童

「なんだ？  
座敷童がいなくなるってのに、誰も止めないのかよ」

女房

「あなたを連れて来た長男が旅立つの。  
あなたも好きなどころに行きなさい」

座敷童

「いいのか。俺がいなくなったら、ひどく貧乏になるぞ」

長者

「もともと田舎の貧乏長者だ。余計な富などいらん」

座敷童

「なんだ、つまらん…いいのか。本当に行くからな」

座敷童、立ち去りかけて、

座敷童

「…どうしたんだよ、結果をはれよ。俺を引き止めるよ。  
別に俺、本気で逃げようとしてたわけじゃないのに…。  
ダメだ、ダメだ。この家にはもう、俺の招くべき福はない…」

長者

「その後、昭和の激動の中でこの一族はバラバラになる。  
華々しい…いや、細々とした地主としての歴史は途絶えた」

その場に、僕と彼女だけが取り残された。

彼女

「…うちの父親がね、その長男、ってゆうか、  
長女さんの子供なんだって。  
そうなの。うちね。親類にサンタがいたの」

僕

「先月末に父親を失ってからの彼女は、  
精神的に不安定な状態が続いていたから…」



彼女 「よかった。信じたね」

僕 「え？」

彼女 「信じたね。ありがとう」

僕 「いや、まったく信じてないよ」

彼女 「こんな与太話を信じてくれるなんて、

やっぱり君は面白い大人だ」

僕 「僕は面白いんじゃない。ただ、信じたかったから。

彼女の君の言葉をずっと怖がっていた僕だけど、

最後まで信じたかったんだ。あ、そう、

会うのはこれが最後だと勝手に決めていたんだ。

「さあタクシーで娘のもとに帰るのだよ。

…またな」

僕

「いつもは“じゃあね”だった彼女の別れの文句が

“またな”になっていたので、つまり、そう。

彼女もわかっていたんだ。

これで会うのはもう、最後なんだ」

「…どうして」

僕 「え？」

彼女 「どうして…俺は“女になった”んだろうな」

僕 「どうしてって…君が決めた事だろ。」

あの時、俺は止めた」

「…君は、君の世界を生きているかい？」

「どうだろうな。」

君の前では俺は俺だし、

今夜は…娘のサンタクロースだ」

僕は自分の家に帰る。

玄関の前で確然とする。

僕

「…なんてこった。」

僕が娘の為に買ったプレゼント、プリキュアの…なんだ？

キュアなんとかだ。かわいそうなキュアなんとかが、

玄関の前に捨てられている」

きつと妻の仕業だろう。

僕

「…まあいい。来年のクリスマスは、

妻とは一緒に住んでいないだろう。娘もそうだ。

これがパパの、サンタクロースとしての、

最後の役目だったんだけど…」

玄関の扉を開けると、巨大なダンボールが。

僕 「いつ誰が、どうやって運んだのかはわからない。しかし、その瞬間、信じてしまったのだ。誰だお前は。いや…知っている。俺はお前を知っている」

サンタクローズに扮した男が現れた。三太郎だろう。

僕 「来てくれたのか」

三太郎 「信じてくれたからね」

僕 「俺が？」

三太郎 「マナミちゃんだよ。そして君が、

僕 「マナミちゃんが僕を信じることを、許したからね」

僕 「情けないよ。お願いだ、来年からは、

娘のプレゼントは君たちにお願ひするよ。

俺は父親としては最低だ。

三太郎 「サンタの真似なんかしてみてもこのザマだ。

僕 「でも…よかった。来年からは、君たちが…」

三太郎 「それで本当にいいのかい？」

僕 「本当は来年も君は、年に一度だけでも、サンタとして

マナミちゃんの枕元に現れたいんじゃないのか？」

僕 「いや…俺は…」

妻 「誰と話してんの？」

いつのまにか妻。

サンタはその姿を消した。

僕 「おい。マナミのプレゼント…」

僕 「だから無いってば。どこに置いてたの」

僕 「捨てただろ。そこに」

僕 「…知らないよ」

僕 「じゃあなんだ、サンタが捨てたってのか？」

僕 「なに言ってるの？」

僕 「……」

僕 「ねえ、あの段ボールなんなの？」

僕 「すごいと思わないか。玄関よりも、大きなあんなの

僕 「どうやって運び入れたんだと思う？」

僕 「え？」

僕 「人間の仕業じゃないんだ。あれには

僕 「マナミが望んだものが入ってる。

僕 「俺は、震えていた。それを見て、妻も震えていた」

僕 妻

「いや震えてないけど…」  
「こんな俺と、こんな妻の間で暮らしていた娘が、クリスマス夜の夜にサンタクロースに何を望んだのか。その本当を知るのが怖かったんだ。キュアなんとかじゃない…キュアなんとかよりも、もっと切実な何かをあいっは望んだはずだ。バカにするな…おかしいうことは十分わかってる…」

姿の見えなくなったサンタクロースに僕は問う。

「なあ…今夜、

マナミは何が欲しいって思ってたんだろう」

リビングへのドアノブがガチャリと開く。

マナミが寝室から起きて来た。

僕はマナミにプレゼントを渡す。

僕

「マナミ…。  
ほら、キュアなんとかだ。  
クリスマスにあちこち探して買って来たんだよ」

マナミには、そんな嘘は通じない。すぐに白状する。

僕

「…嘘だ。アマゾンで3分だ。  
なんの苦労も、  
なんの悩みも無く買って来た」

僕は巨大な段ボール箱を指し示し、

僕

「この箱はね、本物のサンタさんがくれたんだよ。  
凄いだろ。マナミ。お前が欲しい物が入ってるんだ。  
こっちには、本当にお前が欲しい物が入ってるんだよ」

マナミがダンボールの包装を解いた。

何も、入ってなかった。

僕 妻

「…え？何？」

「え？」

「からっぽ？」

「いや、待って。ここに何か書いてある」

「どこ？」

「なんだこれ…」

僕 妻 僕 妻 僕 妻

僕と妻は、巨大な段ボールの中へ。

突如、鳴り響く轟音。

あたり一面、暗闇に包まれる。

僕

「ダンボールのフタが、

一気に閉められた。

マナミの笑い声が聞こえる。

俺と妻は、

プレゼントの中に閉じ込められたまま、

もうずっと動けなかった」

寄り添う二人の男と女。

人形のように固まっている。

了

※ 上演を希望する際は、有料・無料に関わらず、必ず劇団までご連絡いただき、戯曲使用の許諾をお受けください。